

京都橘大学 文化財調査報告 2012

醍醐寺清瀧宮拝殿、橿原丸山古墳、鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群

2013年3月
京都橘大学 文学部

はじめに

本学の文化財学科は1996（平成8）年に設置申請し、同年12月に認可され、1997（平成9）年4月より開設された。その設置理由を当時の門脇禎二学長は「①文化財・伝統文化を尊重する心と専門的知識・技能の基礎を身につけて、研究者・職業人をめざしたりあるいはすぐ社会生活に入る学生の育成と、②体系的な「文化財学」の創出をめざす研究の進展、を目的においた」とした。

そのうちの専門的知識・技能の基礎を身につける一環として、本学では2000（平成12）年3月から開始した京都市伏見区にある法琳寺跡の測量調査以降、近畿地方東北部をフィールドの中心とし、発掘・測量調査を継続して行ってきた。調査には多くの学生が参加し、現場における実践的な調査の方法や技能を学び取っている。

本年度は主に、鹿谷古墳群において測量調査を実施した。その成果を中心として、本報告書で報告する。報告書を作ることもまた学生が調査から報告書発行までの一貫した流れを知るための大切な作業であり、これらの活動全体を通じ、文化財のより一層の周知に役立てられれば幸いである。

また、本年度からは、世界遺産や文化的景観など、多様化する文化財とその周辺学の拡がりを省みて、「人類の所産のうち、考古資料、彫刻、絵画、工芸品、歴史資料などの動産遺産と、建造物、近代化遺産、都市・文化的景観、史跡、埋蔵文化財といった土地に定着した不動産遺産、これらの2つの領域の文化遺産情報を対象として歴史遺産という認識の学びに高め」るために、文化財学科から歴史遺産学科へ学科名を変更した。

今年度から、この文化財調査報告には、従来の埋蔵文化財に加えて、建造物も含めることになった。

我々がここで歴史遺産に関わる作業と勉学に向かえるのは、ひとえに調査にあたらせていただく際の現地の方々や、多くの関係者の方々のご理解・ご協力の賜である。この場を借りて心から感謝申し上げる。今後とも文化財調査についての変わらぬご理解、ご協力、ご指導を賜りたく、お願い申し上げる次第である。

2013年3月31日

京都橘大学文学部

例　　言

1. 本書は、京都橘大学が2012年度に実施した京都府亀岡市鹿谷古墳群や京都市醍醐寺清瀧宮拝殿などの調査報告である。
2. 調査した遺跡と遺構には、国土座標世界測地系によってその位置を示した。
3. 本文の執筆には、第1章を村岡瑞穂、第2章を登谷伸宏、第3章を一瀬和夫・荒木瀬奈、第4章を荒木瀬奈、第5章を八軒かほりがあつた。なお、第3章の文章作成には岡本篤志氏、中日本航空株式会社に資料を提供いただいた。
4. 本書の編集は、一瀬和夫・村岡瑞穂が担当し、各執筆者や参加学生がこれを助けた。
5. 調査にあたっては、總本山醍醐寺文化財管理室、高島市教育委員会、高島市歴史民俗資料館、京都大学大学院工学研究科、宮内庁書陵部、奈良県立橿原考古学研究所、橿原市教育委員会、京都府立大学考古学研究室、大手前大学、大手前大学史学研究所、京都国立博物館、亀岡市文化資料館、龍潭寺、長瀬福男、白井忠雄、山岸常人、徳田誠志、菅谷文則、西藤清秀、井上輝好、中谷治、元井芳昭、西川隆彰、竹田正則、米田一、土屋みづほ、堂ノ本智子、菱田哲郎、樋本誠一、森下章司、岡本篤志、西村秀子、宮川禎一、富山直人、前田俊雄、三好玄、笠栗拓、樋口隆久、黒川孝宏、土井孝則、奥村弥恵、瀬口眞司をはじめとする関係機関、諸氏諸嬢にご高配を賜った。記して感謝したい。

目 次

はじめに・例言

目次

第1章	2012年度の文化財調査概要と経過	1
第2章	2012年度の建造物調査	3
第3章	橿原丸山古墳測量調査 (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)	6
第4章	鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群墳丘測量調査 (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)	16
第5章	近江湖西地域の横穴式石室－石室の規模と石組み－	28
報告書抄録		

図・表目次

図1	下醍醐伽藍配置図	3
図2	山下清瀧宮修理遷座指図	4
図3	清瀧宮配置図	4
図4	清瀧宮拝殿平面図	4
図5	橿原丸山古墳及びその周囲の古墳分布図	6
図6	橿原丸山古墳周辺航空レーザ広域図	7
図7	橿原丸山古墳墳丘測量原図	9
図8	橿原丸山古墳計測成果各種	14
図9	鹿谷古墳群及び関連古墳分布図	17
図10	鹿谷古墳群大市支群Ⅲ・Ⅳ墳丘測量図	21
図11	鹿谷古墳群大市支群Ⅲ・Ⅳ墳丘復元図	22
図12	鹿谷古墳群茶ノ木山支群とその周辺古墳の分布図	25
図13	鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳頂平面図	26
図14	近江の地域区分	28
図15	四郷崎古墳の横穴式石室	28
図16	横穴式石室を内部主体とする古墳と花崗岩の分布	29
図17	田中36号墳の横穴式石室	30
図18	西牧野41号墳の石棚の配置	30
図19	横穴式石室の各名称	31
図20	主な敷石の特徴	31
図21	北牧野2号墳の横穴式石室	32
図22	湖西地域の横穴式石室玄室平面規模分布図	40
図23	湖西地域の時期別横穴式石室玄室規模分布図	41
表1	湖西地域の横穴式石室・湖西南部地域	33～37
表2	湖西地域の横穴式石室・湖西北部地域	38

第1章

2012年度の文化財調査概要と経過

1. 2012年度の調査状況

今年度の現地調査作業については、夏季を中心に、京都府亀岡市鹿谷古墳群大市支群で測量調査を行った。整理については、大市支群を中心に作業するとともに、年度下半期には鹿谷古墳群茶ノ木山支群の測量と併せ実施した。

今年度は8月後半を中心にこれら考古学調査に加えて、醍醐寺清瀧宮拝殿とびれっじ1号館（高島まちづくり交流サロン）の建造物調査も行った。

本書の全体の整理作業にあたっては、考古学実習の授業を中心に、厚見清香、有澤祥太、川島浩幸、北垣巴恵、小杉理実、佐藤悠歩、長井郁織、広瀬侑紀、水谷篤司、安田泉、岡本真央、齋藤神奈、鈴木 茂、八軒かほり、村岡瑞穂、荒木瀬奈が行った。

こうした大学主体の調査の他に、大手前大学史学研究所と共同して、3次元レーザ・スキャニングによる権原丸山古墳墳丘全体の測量図を編集作図した。

さらに、昨年度に引き続き、本学と財団法人滋賀県文化財保護協会と連携して、「地域貢献・社会貢献の一環として人材育成とその展開のための教育プログラムの実施」を8月に試みた。また、イタリア・ソンマの東京大学の調査には、齋藤神奈、奥村祥子、小栗 実、鈴木智子、清野友理、星川拓也が参加した。

こうした中、今年度に実施した主な調査の概要は、以下に紹介する通りである。

2. 醍醐寺清瀧宮拝殿の実測調査

建造物調査を行った京都市にある醍醐寺清瀧宮は、下醍醐のうち金堂・五重塔などから構成される伽藍主要部の南西に位置する。醍醐寺の総鎮守である清瀧権現を祀る鎮守社で、本殿・拝殿からなる。このうち、本殿は1517（永正14）年の建立で、重要文化財に指定されているが、拝殿はこれまで調査が行われておらず、歴史的な評価が定まっていなかった。今回は、拝殿の建立年代・建築的特徴、歴史的価値を明らかにすべく、醍醐寺の協力のもと、調査を実施した。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2012年8月27～28日

に行った。調査の実施にあたっては、京都大学大学院工学研究科教授山岸常人氏の指導を賜った。

調査参加者は、上原 周、小熊裕海、門脇 彩、北山友貴、草瀬麻公、壽 彩佳、坂本 海、清野友理、藤田可奈、星川拓也、有澤祥太、北垣巴恵である。

3. びれっじ1号館（高島まちづくり交流サロン）

滋賀県高島市にあるびれっじ1号館は、大溝城下町を通る北国街道沿いに位置する町屋である。所有者は福井三郎家で、現在はびれっじ事業協同組合が管理し、店舗・交流サロンとして活用している。

大溝藩は分部家を藩主とする2万石の小藩で、1619（元和5）年に分部光信が伊賀上野から入封したことに始まる。城下町は城郭を持たない陣屋町として発展した。城下には、北国街道（=本町通）が通るとともに、琵琶湖の主要な湊のひとつであった大溝湊があり、湖西における商業・流通の拠点として機能した。びれっじ1号館は本町通の南寄りに位置し、城下の有力な商人であった福井家の分家である福井文次郎家が所持していた。近世には絞油、米穀・肥料などの商売を営んでいたという。

この建物については、1998（平成10）年度に実施された旧大溝城下町の民家調査においてとりあげられており、建築的特徴が明らかとなっている（『高島町旧大溝城下町の民家』高島町歴史民俗叢書第9集 高島町教育委員会 2001年）。そのため、今回は改めて実測調査・痕跡調査を行い、報告書には記されていない詳細な情報を収集するにとどめた。

調査は登谷伸宏を調査主任とし、2012年8月31日に行った。

調査参加者は、上原 周、小熊裕海、門脇 彩、草瀬麻公、壽 彩佳、坂本 海、清野友理、藤田可奈、星川拓也、有澤祥太、北垣巴恵である。

4. 鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群墳丘測量調査 (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)

鹿谷古墳群は京都府亀岡市薄田野町鹿谷一帯、行者山南麓の低丘陵上に古墳が群集するものである。その南側の扇状地に展開する鹿谷遺跡の墓域と考えられている。イギリス人のゴーランドが調査を行った古墳の所在は長らく位置不詳とされてきた。ところが2009年、薄田野町鹿谷大市を中心とした龍谷大学考古学研究会の踏査で新たに確認された古墳のうち1基が、ゴーランドにより石室撮影されたものと関連することが分かってきた。

そこでこの3年間、その古墳とその周囲の実態をつかむため、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーとともに測量調査を行った。本年は、昨年に引き続き古墳周辺とともに、屋根上の石棚のある円墳を中心に墳丘測量を行った。20cmセンター、縮尺1/100の図化である。

調査は調査主任を一瀬和夫とし、大市支群を2012年8月7～20日に実施した。

調査参加者は、門脇 彩、壽 彩佳、恒吉礼乃、岡野翔、小熊裕海、坂本 海、有澤祥太、川島浩幸、鈴木茂、荒木瀬奈である。

山頂にある茶ノ木山支群についても2012年11月23日、12月29・30日、2013年3月23日に測量調査を実施した。

調査参加者は、浅井千鶴、奥村祥子、小栗 実、清野友理、川前陽生、北山友貴、鈴木 茂、荒木瀬奈、竹村亮仁である。

5. 上御殿遺跡、金ヶ森遺跡の発掘調査

(「地域貢献・社会貢献の一環として人材育成と
その展開のための教育プログラムの実施」)

昨年度に続いて本学と財団法人滋賀県文化財保護協会が連携して行った、発掘調査を通じた人材育成を目的としたプログラムである。



写真1 鹿谷古墳群大市支群IV-1号墳南東裾（北北西より）

高島市安曇川町三尾里所在の上御殿遺跡と守山市金森町所在の金ヶ森遺跡の発掘調査に参加した。

上御殿遺跡は、河川改修工事に伴う発掘調査である。弥生時代後期（もしくは古墳時代）の木棺墓、古墳時代前期の竪穴住居、古墳時代後期の溝、奈良時代頃の掘立柱建物、平安時代後半の掘立柱建物や溝などが検出されている。

金ヶ森遺跡は、県道の拡張工事に伴う発掘調査である。弥生時代～中世の建物跡や溝跡など集落に関わる遺構、滑石製模造鏡や有孔円板などの特徴的な遺物が出土している。南側に隣接する横江遺跡では、県道草津守山線建設に伴う発掘調査で、平安時代の建物跡などが検出されている。また、西方の団地建設に伴う発掘調査でも鎌倉時代～室町時代の区画溝をもつ非常に大規模な集落跡が見つかっている。さらに南側の下長遺跡では、工業団地建設等に伴う発掘調査で、古墳時代前期の区画を伴う大型建物や独立棟持柱建物などの遺構とともに、鏡・石鉤・柄頭・儀杖・団扇状木製品などが出土したことから、湖南地域における古墳時代前期の拠点集落のひとつと考えられている。

調査参加者は、浅井千鶴、蔵脇彩花、村上宏絵、川崎瑠璃子、嶋川 瞳、草瀬麻公である。



写真2 鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳墳頂（南南東より）



写真3 鹿谷古墳群遠景（南南西より）

第2章 2012年度の建造物調査

1. 調査経過

今年度の建造物の現地調査は8月に実施し、27~28日に京都市醍醐寺清瀧宮拝殿、31日に滋賀県高島市びれっじ1号館（高島まちづくり交流サロン）で建物の実測調査をそれぞれ行った。本報告書では、このうち清瀧宮拝殿の調査について詳細に報告する。

2. 醍醐寺清瀧宮拝殿の調査

a. 醍醐寺の歴史と伽藍

醍醐寺は山科盆地の東に位置する真言宗の寺院である。9世紀後半、聖宝が笠取山山頂に准胝・如意輪觀音像を安置する仏堂を建立したことが、寺院としての始まりとされる⁽¹⁾。その後、笠取山の西麓にも寺地が開かれた。10世紀の前半には堂舎の造営が進み、寺院としての体裁が整えられていった。この山下の伽藍は下醍醐と呼ばれ、伽藍主要部は、金堂にあたる釈迦堂を中心として、その南東に五重塔、南西に清瀧宮を配していた。金堂の前面には礼堂が附属し、そこから前庭を取り囲むように回廊が廻り、正面中央には中門を設けていた。さらに、主要部を取り囲むように四周に築地が廻り、南・東・西にはそれぞれ南大門・東大門・西大門を開いた。また、寺内には多くの院家が設けられ、全盛期には壮大な伽藍を形成していた。

その後、下醍醐の諸堂は中世を通して焼失・再建を繰

り返すが、1470（文明2）年には大内政弘の軍勢の攻撃により、南大門・東大門・五重塔を残し全焼した。焼失後、1484（文明16）年から清瀧宮の再建が始まったものの、金堂をはじめとする諸堂の再建は進まず、ようやく1598（慶長3）年から、豊臣政権の援助により本格的な伽藍の再興に着手することとなった。現存する金堂は、紀州の湯浅から運んだ仏堂を改造したもので、1599（慶長4）年に上棟を迎えている。さらに、現在の西大門も1605（慶長10）年に建立されたものである。また、三宝院をはじめとする院家も、復興の過程で、秀吉により西大門前に計画的に再配置されており、現在の醍醐寺伽藍の建物、景観はこのときに形成されたものということができる（図1）。

b. 清瀧宮について

今回調査を行った清瀧宮は、醍醐寺の総鎮守である清瀧権現を祀る。清瀧権現は、空海が真言宗の守護神として中国から請來した神で、当初は高雄山に鎮座した。その後、1088（寛治2）年に醍醐寺へ勧請され、翌年には上醍醐、1097（承徳元）年には下醍醐にそれぞれ社殿が建立され、鎮守として遷座されることとなった。

このとき造営された下醍醐の本殿は、一間社流造が2棟並ぶ形式であったが、1150（久安6）年には、両本殿をつなぎその間に宝蔵を設ける形式としたという。当初は本殿のみであったが、平安時代末までには拝殿が備わっている。1178（治承2）年の指図によると、拝殿の規模は桁行七間、梁間三間であり、かつこのときに背面に舞殿が増築されたことがわかる。

その後、本殿・拝殿は、1470（文明2）年に金堂などとともに焼失したが、焼失後もなく仮本殿を造営している。このときの本殿は本格的な建物ではなかったようで、1517（永正14）年には本殿の作事を再び行い、現在にみる本殿が完成した。

一方、拝殿については1541（天文10）年2月に「古屋」を移築しており⁽²⁾、それまで再建が行われなかつた可能性がある。拝殿の本格的な造営は1599（慶長4）年から始まり、同年10月に斬始を行い、11月には上棟を迎えている。慶長度の拝殿は、規模は焼失前と同じだが、柱を角柱としている点が大きく異なっていた。近世に入ると、拝殿の造営・修理に

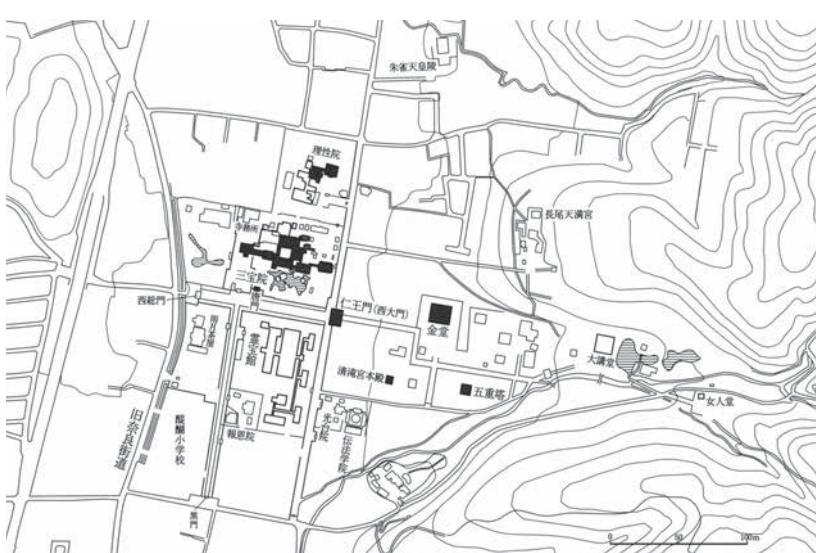


図1 下醍醐伽藍配置図（『醍醐寺大観』第1巻 岩波書店 2002年）

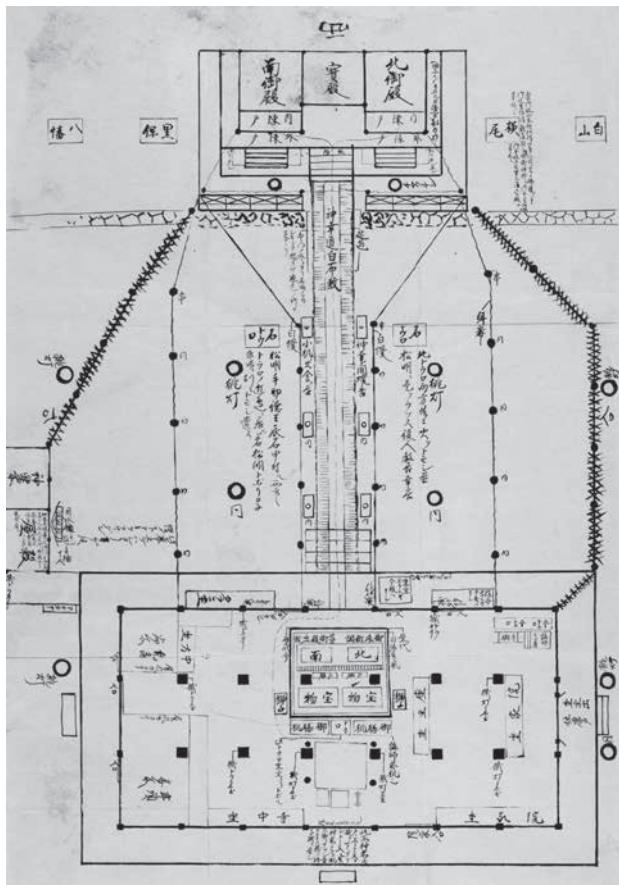


図2 山下清瀧宮修理遷座指図（総本山醍醐寺編『醍醐寺叢書 史料篇 建築指図集』第1巻 白誠出版 2012年）

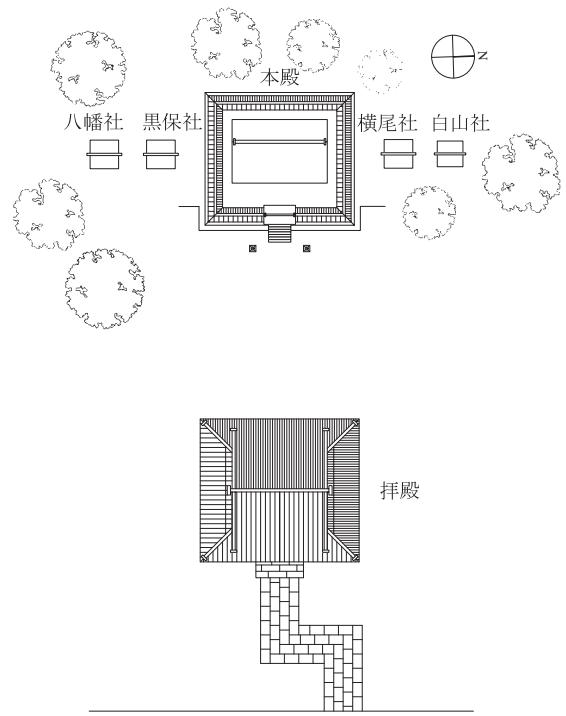


図3 清瀧宮配置図



写真4 清瀧宮拝殿全景

に関する記録がないため詳細は不詳だが、1763（宝暦13）年の清瀧宮本殿遷宮の様子を描いた指図では、桁行七間・梁間三間で四周に縁を廻す形式であることから（図2）、この頃までは中世からの規模を受け継いだ形式であった。だが、現在の拝殿は方三間の平面規模であり、その後建て替えられたとすることができる。

現在の清瀧宮は、三間社流造の本殿（重要文化財）・中門・拝殿が東西軸線上に並ぶ。本殿は乱石積の基壇上に建つ。周囲には透屏を巡らせ、正面中央に中門を置く。基壇両脇には摂社を2棟ずつ配しており、その構成は北が白山社・横尾社、南が黒保社・八幡社である。拝殿は三間四方の規模を持ち、本殿の東側に位置する（図3）。

c. 清瀧宮拝殿について

今年度は、現在の拝殿の建立年代、建築的特徴を明らかにするため、平面の実測、痕跡調査などを実施した。その成果を以下に示す。

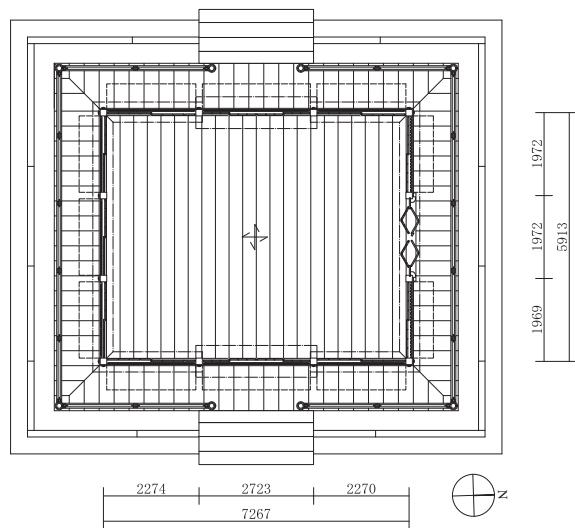


図4 清瀧宮拝殿平面図



写真5 清瀧宮拝殿北側面詳細



写真6 清瀧宮拝殿小屋組



写真7 清瀧宮拝殿軒廻り詳細



写真8 清瀧宮拝殿内部

清瀧宮拝殿 桁行三間、梁間三間、入母屋造、桟瓦葺
19世紀後期（推定）
角柱 切目長押 内法長押、正背面中央間のみ切り上げ
舟肘木 中備なし 妻飾木連格子 二軒疎垂木

やや小規模で、装飾のない簡素な建物である。柱を切目長押・内法長押で繋ぎ、柱頂に舟肘木を置く。内法長押上の小壁のせいが小さく、全体として重心の低い印象を与える。四周には縁を廻し、組高欄を備える。軒は木舞を打った二軒で、地垂木・飛檐垂木とも下面に大きな面をとるとともに、地垂木先端に大きな反り増しをつけるのが特徴である。

内部は一室で、格天井を張る。各柱間には蔀を吊り、室内側に障子を入れるが、北側面中央間のみは唐戸とする。1763（宝暦13）年の指図（図2）でも、拝殿の北側面中央間に唐戸を設けており、その形式を受け継いでいる。

るものと考えられる。なお、現在、中央間の室内側には双折れの障子を入れるが、敷鴨居に二本溝があることから、もとは障子が入っていたと考えられる。

小屋組は、側通りに土居桁を廻しその上に梁行方向へキングポストトラスを架ける。

建立年代を示す史料はなく、小屋組にキングポストトラスを用いること、部材の風蝕などから19世紀の後期の再建と考えておきたい。

近世的な装飾を用いない古式で上質なつくりの建物であり、醍醐寺境内の文化財として貴重である。

注

- (1)『醍醐寺大観』第1巻（岩波書店 2002年）。以下、醍醐寺、および清瀧宮の歴史に関する説明は同書による。
- (2)『嚴助大僧正記』天文10年2月日、5月朔日条（『続群書類從』30上）

第3章

橿原丸山古墳測量調査 (ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)

1. はじめに

橿原丸山古墳は、奈良県橿原市五条野町・大軽町・見瀬町にまたがって所在する大形前方後円墳である。奈良県下最大であり全国的にみても6番目の規模を持つ墳丘と、類例のない日本最大規模の横穴式石室を持つ。この古墳は、明治時代にイギリス人のウイリアム・ゴーランドによって墳丘と石室の測量図が作成され、また当時の墳丘の様子が写真撮影されている。これらの写真や資料がイギリス大英博物館のゴーランド・コレクションの中に保存されている。

ゴーランド・コレクションについては、現在、本学の一瀬和夫がメンバーの一員となってイギリス側の大英博

物館、セインズベリー日本藝術研究所などとゴーランド・コレクション調査プロジェクトを進めている。このコレクション調査の目的の1つには、ゴーランドが関わった日本国内の遺跡や古墳を詳細に調査することがあげられる。そこで、この研究作業の一環として、2011年度に橿原丸山古墳の後円部の一部を測量調査したが、2012年度には墳丘全体の理解を深めるために、地上とヘリコプターによる成果と3次元レーザ・スキャニングを行った。本稿では、このスキャニング測量調査による成果と、大手前大学史学研究所の岡本篤志氏を中心にして、図7では航空レーザ測量データ(50cmメッシュ)を修正した測量図化、そして図6に示すように、その成果と国土地理院の基盤地図情報(航空レーザ5m数値標高データ)とを組み合わせて南側の欽明陵古墳、東側の植山古墳の一部をも含んだ広域図化作業についてを報告する。

2. 橿原丸山古墳の概要

古墳時代後期後半に築造された墳丘は南からのびる丘陵の先端付近の傾斜地に位置し、周辺には、丘陵や谷を挟んで植山古墳や菖蒲池古墳などの後・終末期古墳が単独に近い状態で点在している。橿原丸山古墳も単独で分布しており、この谷付近では、南側に丘陵を挟んで全長140mの欽明陵古墳が分布する他には、大形前方後円墳は見られない。

墳丘主軸方位はN-34°-Wであり、前方部が北西方向を向く。墳丘規模は昨年度に行った復元値を括弧内で示すと以下のようになる。周溝長約360(404)m、墳丘長約310(331)m、後円部径約150(173)m、同高さ約21(25)m、前方部幅約210(270)m、同高さ約15(15)mとなる⁽¹⁾。この墳丘規模は奈良県下最大であり、全国的に見ても、大阪府仁徳陵古墳、応神陵古墳、履中陵古墳、岡山県造山古墳、大阪府河内大塚山古墳について6番目に大きな規模を誇る。墳丘周辺には盾形の周濠が全周し、外堤と目される周庭帯も広がる。今回の測量ではその痕跡がよく残る東側部分も図化範囲に入れた。

内部構造は自然石を使用した両袖式の横穴式石室で、真南から西に11°振った方向に開口する。宮内庁の調査成果によると、全長28.4m、玄室長8.3mを測り、日本最大の石室規模を誇る。平面形は羽子板形に近い形状をなすことや、羨道が異常に長いこと、石室構築に巨石を使用することなどを特徴とする。

玄室内には、2基の石棺が置かれており、奥棺は石室主軸に対して直交、前棺は同主軸に対して平行し東寄り



図5 橿原丸山古墳及びその周囲の古墳分布図



図6 檜原丸山古墳周辺航空レーザ広域図（航空レーザ50cmメッシュ、5 mメッシュ）

に位置する。2基とも竜山石製の削抜式家形石棺である。蓋部の観察から、奥棺の方が新しい型式になることが判明している。出土遺物は、1992（平成4）年の宮内庁の石室内実測調査の際に、須恵器片などが採取され、これらの須恵器片は田辺昭三編年のTK43型式の特徴を持っていることが指摘されている⁽²⁾。また、この調査以前に後円部付近で双鸞瑞花文八花鏡（唐式鏡・京都大学蔵）が採取されている。

以上の要素により、丸山古墳の築造年代は古墳時代後期後半の6世紀後半であるとされる。

このように、橿原丸山古墳は奈良県最大の前方後円墳であり、日本最大規模の石室を持つことなどから、その調査成果は古墳研究において重要な位置を占めると言えるだろう。

3. 調査に至る経緯

今回の橿原丸山古墳の測量図化は、本学・京都府立大学・大手前大学・大手前大学史学研究所を主体として行っているゴーランド・コレクション調査プロジェクトの研究作業の一環となる。このプロジェクトは海外に所在する日本の古墳時代遺物の基礎資料化、及び調査記録データの共有化を通じて日本の古墳時代研究の多様化・国際化を目指すものである。このプロジェクトでの主な作業は、イギリスの大英博物館所蔵のゴーランド・コレクション内にある古墳出土資料の網羅的・総合的研究を行うとともに、ゴーランドが残した大王墓級前方後円墳測量図や写真記録についても、資料を観察・図化することであり、これらの作業によって、現在の古墳時代研究の水準でのゴーランド・コレクションの再評価を目的とする。

橿原丸山古墳については、ゴーランドが明治時代に現地に訪れて、写真撮影や石室計測、墳丘測量図を作成するとともに、その出土品や調査資料がゴーランド・コレクション内に保存されている。今回のプロジェクトの作業の中でも、ゴーランドがイギリスの学会で発表・紹介した墳丘図と現状との比較は欠かせないものであり、測量成果と照らし合わせ、ゴーランドの収集した他の資料に対する考え方や手法及び業績が再評価できるとの考えから、昨年度は橿原丸山古墳の墳丘と石室との関係を明らかにするために、後円部の石室周囲の測量調査を行うに至った。その後、奈良県下最大の墳丘と今後のその裾の確認次第では日本第5位ともなろうことや周囲の周庭帶の性格を考えるために広範囲の墳丘の詳細な測量図の

必要性から、広範囲なヘリコプターによる3次元レーザ・スキャニング図化を行うこととなった⁽⁴⁾。

4. 2012年度の図化作業について

まず、今年度の図化は中日本航空がヘリコプターによって測量図を作成した。さらに、それを基にして大手前大学史学研究所を中心にデータをまとめた。

最終的な図にまとめるにあたっては、岡本篤志氏が主担した。その手順は次の通りである。

使用データは、航空レーザ測量データ（50cmメッシュ）中日本航空製作、同航空レーザ測量同時撮影航空写真（オルソ画像）＜以上の作業報告は次に掲げる＞、国土地理院基盤地図情報（道路・建物）、国土地理院基盤地図情報（航空レーザ5m数値標高データ）となる。

岡本氏は図化作業にあたって、まず、中日本航空製作の航空レーザ計測データ（アスキーデータ）から、メッシュモデルを作成し、20cmセンターの等高線図の原図を作成した。道路・建物は、国土地理院基盤地図情報を利用したが、それ以降に作られた道路・建物があるため、航空レーザ測量の際に同時に撮影された航空写真（オルソ画像）と合成・比較したのちに、新たな道路・建物データの製作修正を行っている（図7）。

さらに、図6の大縮尺の航空レーザ広域図の作成にあたっては、計測対象である丸山古墳周囲の地形を把握するために、中日本航空製作の航空レーザ計測データと国土地理院 基盤地図情報（航空レーザ5m数値標高データ）を合成することで、広範囲の等高線図（50cmセンター）を作成している。その際、道路・建物に関して、中日本航空のデータ範囲についてはこの度、修正したデータを使用し、航空レーザ5m数値標高データの範囲は基盤地図情報（道路・建物）のデータをそのまま利用することで製作している。

さて、中日本航空製作の航空レーザ測量にあたっては、以下に示す仕様書と業務フローに基づいて作業された。

5. 3次元地形データ作業報告

（中日本航空株式会社製作分）

1. 業務の目的と項目

本業務は、橿原丸山古墳について航空レーザ計測による高精度な3次元データの取得を行い、現況の正確な把握と今後の情報発信及び文化財保護等に資することを目的とする。なお、本業務は2012年度基盤研究（B）「ゴーランドの古墳研究の総合的検証と古墳文化に対する国

際的理解への活用」の中で執行した。

航空レーザ測量

作業計画 1 式、固定局の設置 1 式、航空レーザ計測 1 式、調整用基準点の設置 4箇所、3次元計測データ作成約0.6km²、オリジナルデータ作成約0.6km²、グラウン

ドデータ作成約0.6km²、グリッドデータ作成約0.6km²、写真地図データ作成約0.6km²、図化、等高線データ作成約0.6km²、道路線データ作成約0.6km²、陰影図（地形起伏図）データ作成約0.6km²、数値地形図データファイル作成 1 式、図面作成 1 式。



図 7 檜原丸山古墳墳丘測量原図 (50cmメッシュモデルからの20cmセンター)

2. 業務の実施

a. 関連法令と基準

本業務は、「国土交通省公共測量作業規程」国土交通省（2011年4月）、「国土交通省公共測量作業規程解説と運用」国土交通省（2008年4月）、その他発注者の指示による基準にもとづき実施した。

航空レーザ計測の主な使用機器

レーザ計測機（連続波形記録方式航空レーザ計測システム）=SAKURA II・RIEGL社製LMS-Q560、1台。回転翼航空機=アエロスパシアル製AS350B・機体番号JA9332、1機。

調整用基準点の計測の主な使用機器

GPS受信機-日本GPSソリューションズNetSurv2000=03SP0021・03SP0022・03SP0023・03SP0020・05JA0015・05JA0016、6台。日本GPSソリューションズNetSurvG6-VS=07DC2004・07DC2005・09AP2043・07DC2002・07DC2003・09AP2044、6台。トータルステーション-ライカTCRA1201=NO.221363、1台。電子レベル-ワイルドNA2=NO.215108・ライカNA2002A=NO.94532、2台。

解析計算の主な使用機器

計算ソフト-日本GPSソリューションNS-Note・NS-Survey、2台。データ処理-ベントレーMicroStationV8、5台。

3. 業務フロー

- a. 作業計画→b. 固定局の設置→c. 航空レーザ計測→d. 調整基準点の設置→e. 3次元計測データ作成→f. オリジナルデータ作成→g. グラウンドデータ作成→h. グリッドデータ作成→i. 写真地図データ作成→j. 等高線データ作成→k. 道路線データ作成→l. 陰影図データ作成→m. 数値地形図データファイル作成→n. 図面作成

4. 航空レーザ計測

航空レーザ計測は、航空機に搭載した「航空レーザ計測装置」を用い地表の3次元計測を行うものである。装置は走査式レーザ測距装置、GPS受信機、及びIMU（慣性計測装置）から構成され、地表の物体に航空機からレーザ光を照射し、反射光の到達時間と方向からその3次元座標を取得する。また、レーザを飛行と直交方向にスキャンし、航空機が移動することで面的な計測を行う。実際の作業では、レーザ発射基準点と地表までの距離

をレーザ測距装置で計測し、レーザ発射基準点の位置と姿勢はGPSとIMUで計測する。レーザ発射基準点の位置決定においては、別のGPSを地上の基準点に設置し（または、電子基準点のデータを利用し）、航空機に搭載したGPSの観測データと後処理で基線解析を行い、点群データを取得したものである。

a. 作業計画

本業務の目的・内容を把握した上で、作業の実施方針、工程を立案するとともに、業務に必要な機材、人員の調達を行った。

計測計画

本業務では航空レーザ計測システムを搭載した回転翼機（ヘリコプター）にて、スキャン密度0.5m×0.5mメッシュに1点以上のレーザ点が照射されるように計測諸元で作業を行った。作業は極力地形起伏に沿って（等対地飛行）行い、計測密度の均一化を測った。また丸山古墳の後円墳部分の竹林等植生繁茂箇所について、できる限り地表面を捉えられるような計測コースを設計した。

計測機材及び計測諸元使用センサ

使用センサ- SAKURA II（RIEGL社製レーザ測距儀）。使用機体-アエロスパシアルAS350B型。飛行対地高度-300m。飛行速度-100km/h (50knot)。レーザ発射回数-100kHz。スキャン周波数-80Hz。スキャン角度-±30°（全角60°）。コース進行方向点間隔-0.4m（単コース設計値）。コース直行方向点間隔-0.4m（単コース設計値）。計測幅346m。デジカメ地上解像度-7cm（計測基準面において）。

計測機材の特徴

本業務に使用した回転翼機に搭載した航空レーザ計測システム「SAKURA」は、以下のような特徴を備えている。

固定翼機に比べて低高度からの計測により微弱なリターンパルスも確実に捉える。レーザクラスの安全性が高い（クラス4→クラス1）連続波形記録方式のレーザ計測・解析で下草下の地形等を詳細に再現⁽⁵⁾。従来の機材では、レベル1000精度の等高線作成が限界とされていたが、今回の機材ではレベル500精度まで対応可能（※国土地理院 第17条申請承認済み H20.4）。

b. 固定局の設置

固定局となる地上GPS基準局には国土地理院の電子基準点を用いた。選点は、作業範囲より50kmを超えないようにするため、作業範囲最寄りの電子基準点「広陵」を使用した。

c. 航空レーザ計測飛行

前述の計測計画に沿って、航空レーザ計測システムを搭載した回転翼機（ヘリコプター）にて計測を行った。計測にあたっては計測機材を搭載したヘリコプターを中日本航空会社基地空港である名古屋空港から計測場所最寄りの八尾空港まで空輸し、当該空港を計測基地として滞留し計測飛行を実施した。計測飛行は2012年6月29日の1日で完了した。

計測飛行の点検

各計測飛行後に、計画コース上に実施軌跡を展開した航跡図を作成し飛行結果を点検した。また、GPSの観測状況について以下の事項に留意し点検した。

GPS観測時のPDOPは、3以下を標準とする（「公共測量作業規程の準則 解説と運用」p.225 GPS/IMU解析）⁽⁶⁾。

GPS観測時のGPS衛星の数は、5個以上とする（「公共測量作業規程の準則」第282条）。

d. 調整用基準点の設置

航空レーザ計測完了後の2012年8月8日に、航空レーザ測量成果の標高値検証に利用するための調整用基準点の現地測量を実施した。

測量は4級基準点相当の精度を担保しており、01から04の4点の調整用基準点を計測範囲内に偏りなく設け、GPS測量により水平位置を、水準測量により標高を観測した。調整用基準点の設置位置は、1m四方の平坦なグランド、空き地、道路等を対象とし、4点を設けた。

e. 3次元計測データの作成

3次元計測データ作成では、GPS基線解析により航空機の位置を、姿勢角再生処理で航空機の姿勢を、それぞれ求めた上で、データ合成でレーザ測距データと時刻同期によりそれらを結合させ、レーザ測距点ごとに平面位置と標高を持ったデータ（計測点群データ）を作成した。

（1）GPS基線解析

航空機の飛行経路及びレーザパルス発射位置を正確に求めるため、航空機に搭載したGPS及び電子基準点のGPS観測データを基線解析し、航空機の位置を秒単位で算出した。基線解析では、衛星配置状況や受信衛星数等を確認し、最適な基線解析結果になるよう努めた。

（2）姿勢角再生処理

IMU（慣性計測装置）で記録1/200秒単位の航空機の3軸方向加速度データとGPS基線解析で得た航空機の位置データを融合（慣性複合処理）させ、レーザパルス発射地点の位置と姿勢を正確に求める処理をした。

（3）データ合成

レーザパルス発射地点の位置・姿勢データと、レーザ計測システムで記録したレーザ測距データ（発射角と距離）を時刻同期で結合させ、レーザ測距点ごとの3次元座標を持ったデータ（計測点群データ）を作成した。

（4）座標系の変換とジオイド補正

GPS基線解析に基づいて算出した計測点群データの座標値（WGS84座標系）を日本の平面直角座標系にするために座標変換を行った。座標変換にあたっては、長崎県に適用される第Ⅰ系に変換した。また、WGS84座標系で求めた橢円体高のジオイド補正を行うことで東京湾平均海面（T.P.）を基準とする標高値を算出した。

計測点密度点検

（1）計測範囲全体の計測漏れ点検

航空レーザ計測により得られた計測点群データが必要な範囲を満たしているか点検した。

点検の方法は、計測点群データを計測コースごとに色塗りしてCAD上に展開し、作業範囲に対して不足する箇所がないか目視点検する方法で行った。最終的に計測点群データを全て重ね合わせて、計測範囲において計測漏れがないことを確認した。

（2）計測点密度点検（欠測率の計算）

計測密度点検として、航空レーザ計測により得られた3次元計測データが必要な計測点間隔（0.5m×0.5m）を満たしているかどうかを点検した。

点検の方法は、国土基本図の図郭単位での3次元計測データを計画格子間隔である0.5m間隔の格子で区切り、格子内に1点も3次元計測データが無い欠測メッシュの割合を算出することにより計測点密度を点検した。

欠測率の計算は、以下の式で算出する。

$$\text{欠測率} = \frac{\text{欠測メッシュ数}}{\text{全メッシュ数}} - \frac{\text{水部メッシュ数}}{\text{全メッシュ数}} \times 100$$

点検の結果、欠測率は全体平均で2.12%、最小で0.12%、最大で6.4%となった。欠測率に関する基準値は15%（「公共測量作業規程の準則」第293条5）以内とされており、すべての図郭において準値を十分満足していることを確認した。

三次元計測データの標高較差点検

（1）コース間標高較差点検

計測コース（全4コース）については、隣接するコース間の重複部分において点検箇所を選定し、コースごとの標高値を比較点検した。

点検箇所は、重複コースの比較が確実に行えるように

平坦で明瞭な地点を選定した。すべての箇所において、基準値±30cm以下（「公共測量作業規程の準則」第289条2、6）であること（最大較差-3cm）を点検した。

（2）調整用基準点による標高較差点検

3次元計測データと調整用基準点の標高較差を求ることで、3次元計測データの点検を行った。

その手順は実測で求めた各調整用基準点の標高と、一辺1mの正方形内にある計測点の標高との較差を求める。そして、各調整用基準点における上記較差の最大値、最小値、平均値、標準偏差、RMS誤差を求める。実測箇所全体（全調整用基準点）の較差の平均値、標準偏差、RMS誤差を求め、各値が±25cm以下であることを確認する。点検の結果、公共測量作業規程の準則で定める制限値（標準偏差25cm以内又は平均値が±25cm以内）であるかを確認した。

調整用基準点と3次元計測データとの標高較差を求ることにより、3次元計測データの点検を行った。4箇所を点検した結果、較差の平均-0.03m、標準偏差0.011m、最小値-0.04m、最大値-0.01mとなり、十分制限値内（標準偏差15cm以内又は平均値が±15cm以内）の良好な値であることを確認し、計測データの再計算処理、または再計測作業は不要と判断した。

f. オリジナルデータ作成

オリジナルデータは、3次元計測データの点検結果を基に必要に応じて標高値の一一律オフセット補正を行ったデータである。本業務では前段で報告したとおり、3次元計測データは良好な標高精度を有していたので、そのままオリジナルデータとして採用した。

また、3次元計測データをオリジナルデータとして採用するにあたっては、3次元計測データに含まれる雲、塵、乱反射等によるノイズデータ（空中ノイズ及び地中ノイズ）を除去する処理を施した。

g. グラウンドデータ作成

（1）フィルタリング処理

グラウンドデータを作成するため、フィルタリングと呼ばれる処理を行った。この処理ではレーザ計測により得られた点群データ（オリジナルデータ）から、地上の地形・地物（植生・建物等）を分類した。フィルタリングの対象項目は「公共測量作業規程の準則（平成23年4月）」によるものとする。

この作業は、自動処理で大まかな分類を行った後、作業者の目視により、除去しきれない地物や欠落した地形について確認しながら修正、編集を行った。

（2）フィルタリング対象項目

交通施設

道路施設等-道路橋（長さ5m以上）、高架橋、横断歩道橋、信号灯、道路情報板等。鉄道施設-鉄道橋（長さ5m以上）、高架橋（モノレールの高架橋含む）、跨線橋、プラットフォーム、プラットフォーム上屋、架線支柱、信号灯支柱。移動体-駐車車両、鉄道車両、船舶。

建物等

建物及び付属施設等-一般住宅、工場、倉庫、公共施設、駅舎、無壁舎（温室、ビニールハウス）、競技場のスタンド、門、プール（土台部分含む）、へい。小物体-記念碑、鳥居、貯水槽、肥料槽、給水塔、起重機、煙突、高塔、電波塔、灯台、灯標、輸送管（地上、空間）、送電線。

水部等

水部に関する構造物-浮き桟橋、水位観測施設、河川表示板。植生-樹木、竹林、生垣（地表面として、判断できる部分は可能な限り採用するものとする）。

その他大規模な改変工事中の地域（地表面として、ほぼ恒久的であると判断できるものは採用するものとする）、地下鉄工事等の開削部、資材置場等の材料、資材レーザスキャン角度や植生繁茂の影響を受けて、必要とするグラウンドデータが存在しない箇所のうち、宅地地盤等の明瞭に地盤面が推定補足できる箇所においては、後工程の等高線データの描画を適切にするために必要に応じて仮想の計測点を挿入作成した。

仮想の計測点を作成することが適切でない同様な箇所については、グラウンドデータの不足により地形モデルの信頼性が劣化していることを表わす、特別な境界線を「高密度植生範囲」として取得明示した。

（3）フィルタリング点検

作業者の目視による点検、編集の工程は、多角的な点検を実施しデータの精度確保に努めた。またISOの訓練教育に従い十分な技量を取得した者が処理にあたった。

h. グリッドデータ作成

フィルタリング処理後のグラウンドデータからTIN（不整三角網：Triangulated Irregular Network）データを作成し、TINデータから0.1mグリッドの標高データを算出した（図8-8）。

i. 写真地図データ作成

レーザ計測時に同時に撮影したデジタルカメラ画像を用いて、簡易オルソフォトデータ（簡易正射画像）を作成した。カメラの位置・姿勢角はレーザ計測データと同

じGPS/IMUデータを用い、カメラのシャッター時刻と取り付け位置等のパラメータを利用して作成した。また、正射変換にはグラウンドデータから作成した地形モデルを用い、モザイク処理では画像間のカラー調整を行い、白とび・黒つぶれが生じないよう色調整を実施した。写真地図データの地上分解能力は10cm/pixelとした。

なお、簡易オルソフォトデータに付属する位置情報として位置情報ファイル（ワールドファイル）も同時に作成した。

5. 図化

j. 等高線データ作成

航空レーザ測量によって得た成果を地形図として利用するための基礎データとして、等高線データを作成した。まず0.1mグリッドデータからTINを生成し、次にTINで構成されるポリゴンの線上に主曲線・計曲線にあたる高さの点を直線で結ぶことで等高線を自動生成した（図8-8）⁽⁷⁾。作成した等高線データは、オルソ画像との重ね合わせにより異常個所の目視点検を実施した。

k. 道路線データ作成

等高線データに加えて、現地の概略位置把握のための道路境界線（真幅道路線）を合わせて取得した。道路境界線は、本業務で作成した写真地図データ等から入力取得することも可能ではあったが、現在入手利用できる既存公開データで、より高精度な道路線データが、国土地理院で公開している基盤地図情報に存在していたため、それを入手利用した。なお、本業務では道路線データによる等高線データの間断処理は行っていない。

航空レーザ測量から得られる細密なメッシュデータは、様々な解析フィルターを用いることで地形状況を目的に応じて、強調表現することが可能となる。

本業務では、地形を視認し易い地形起伏図という陰影図を作成した（図8-7）。この地形起伏図は、起伏を段彩表示（凹地形は寒色、凸地形は暖色）したものに、斜面の勾配に応じた影をつけたものであり、等高線では表現されない規模の地形起伏も表現でき、従来の標高段彩図が苦手としていた標高差のある場所の地形表現も容易に対応できる。また、カラー表示により起伏の連続性を判断できるため、遷急線、遷緩線の位置や形状、さらには小さな沢の不連続性についても特別な技術がなくとも図示できる。

地形起伏図からは道路や斜面の形状まで見てとれ、特に航空写真からでは植生等に阻まれて判読が難しい樹木

下の地形が分かり易く識別できることが利点である。

I. 数値地形図データファイル作成

各工程で作成したデータについて既定のデータ形式に変換を行い、以下のデータを数値地形図データファイルとして整理した。グリッドデータ及び等高線データは1/500国土基本図郭（東西400m×南北300mの矩形）単位で、写真地図データ及び陰影図（地形起伏図）は作業範囲全体をひとつとして整理し、電子媒体に格納した。

m. 図面作成

作成した各種の数値地形図データファイルを用いて、必要とされる以下の図面を作成、出力した。図面は全てAdobe社のAcrobatに代表されるpdf形式で出力、格納した。なお、これら出力図面のpdfファイルのレイヤー機能を用いて、図面内の必要な情報のみに限定した表示非表示の制御を行うことが可能となっている。

作成図面

（1）等高線図（道路線含む） 図8-1・2

数値地形図データファイルの等高線データを用いて、2種類の等高線図を作成した（主曲線50cm、主曲線10cm）。

（2）等高線図と写真地図の重ね図 図8-6

等高線図の背景に写真地図データを重ね、現況地物の判読とともに地形形状の把握がし易い図面を作成した。

（3）等高線図と陰影図（地形起伏図）の重ね図 図8-5

等高線図の背景に陰影図（地形起伏図）を重ね、直感的かつ定量的に地形形状の把握し易い図面を作成した。

（4）その他（アナグラフ等） 図8-3・4

陰影図（地形起伏図）及び写真地図を基にして、どこでもだれでも簡単手軽に立体画像を見ることができるアナグラフ図面を作成した。地形起伏図を使ったアナグラフは古墳を含めた地形そのものの立体感を、写真地図を使ったアナグラフは現在の古墳周辺の市街地の様子を、それぞれリアルに見て確認、把握することができる。アナグラフ（3：地形起伏図 4：写真地図）。

6. おわりに

今回測量図化したことにより、昨年に試みた墳丘復元設計とこの度の3次元の等高線とが比較できるようになった。その結果、双方に矛盾はなく、墳丘長は330mに達すると見てよい。この値は日本第5位の河内大塚山古墳に肉薄するものである。また、墳丘東側にある外堤的な造作は、その蓋然性が高くなった。ただし、その幅は一様ではなく、東側では幅太く高く、上端幅70mが見積

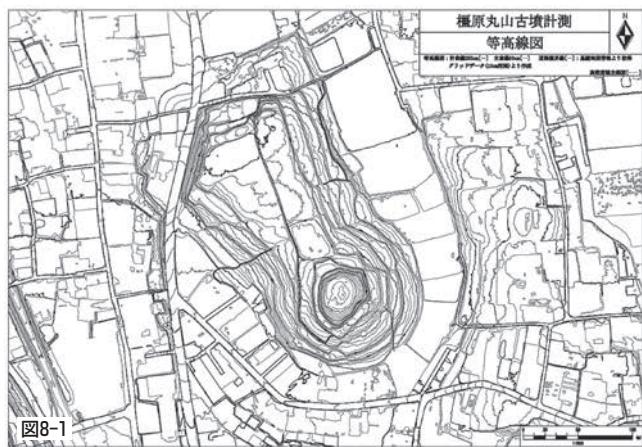


図8-1



図8-2

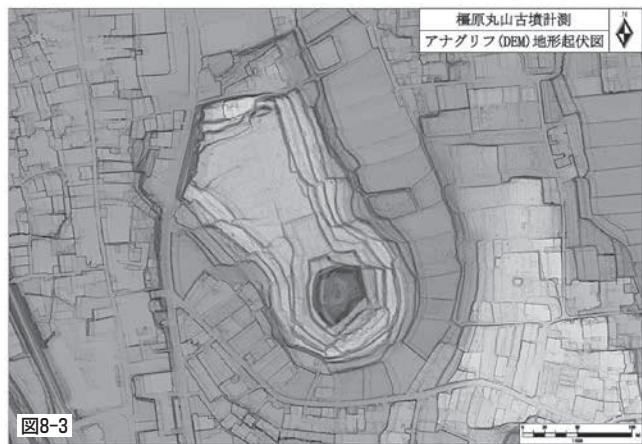


図8-3

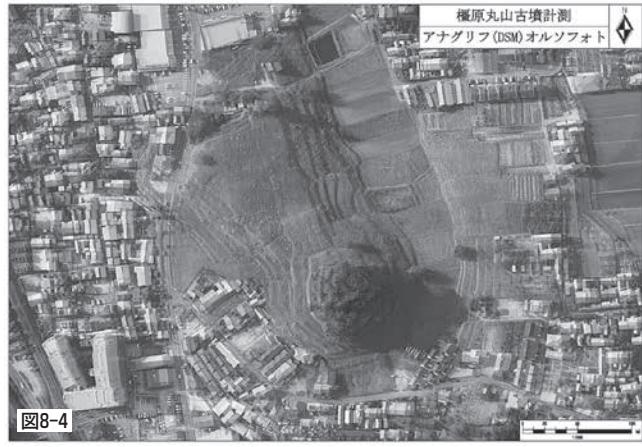


図8 檜原丸山古墳計測成果各種（中日本株式会社製作）



图 8-5



図8-6

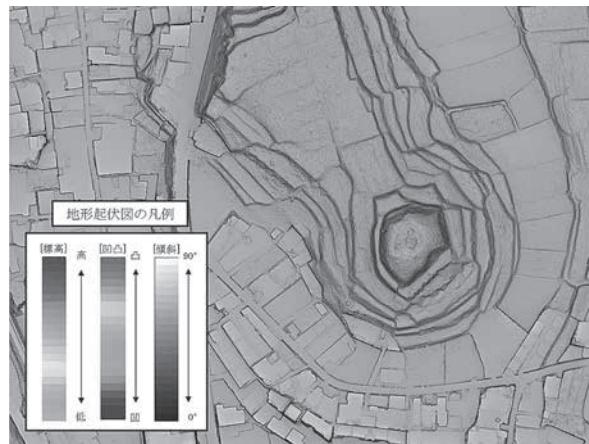


図8-7 陰影図（地形起伏図）の例

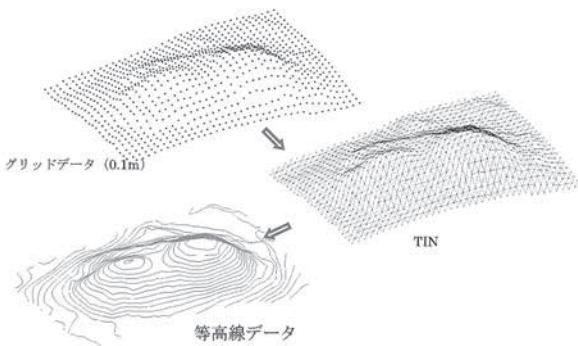


図8-8 等高線データ作成の概念図

もれるが、西側と北側では半分近い40mと幅細くなりそうである。とくに幅細い部分では市街化がはげしいものの、家屋の間の等高線のアップダウンの検出は3次元レーザの得意技と言える。その状況をみると、おおむね堤の連続性がうかがえる。こうした検討は森林の隙間に入り込んで照射できる3次元レーザの利点であり、この度の路や狭い空地に対してのスキャニングに適しているであろう。今後は石室と墳丘との詳細な関係についても利用していきたいと考える。

注

- (1) 既数値は、近藤義郎編1992『前方後円墳集成』近畿編山川出版社。括弧内の数字は、「橿原丸山古墳墳丘模型製作資料」2012『京都橘大学文化財調査報告2011』による。
- (2) 宮内庁書陵部1994「畠傍陵墓参考地石室現況調査報告」『書陵部紀要』第45号
- (3) 猪熊兼勝編1992『見瀬丸山古墳と天皇陵』季刊考古学・別冊2 雄山閣
- (4) 3次元レーザ・スキャニング作業とは、計測対象の位

置・寸法・形状の記録は、文化遺産の保存に関連するプロジェクトには欠かせない作業であり、文化遺産のドキュメンテーションと分析プロセスの重要な部分である。従来の測量は、現場で利用するために、紙に描いた平面図・断面図・立面図のかたちで表現することが一般的であった。しかし、3次元計測技術の新しい手法の開発とコンピュータの利用が進むにつれて、3次元デジタル情報の需要が広がっている。

- (5) 連続波形記録方式とは、従来の航空レーザ計測機材では、レーザ照射1回あたり最大で4点の反射パルスを機上で記録するのに対し、連続波形記録式の機材は、照射中のパルスすべてを波形として記録することができるものである。その波形を解析することで、樹木・下草・地表面に照射されたパルスを分離し、高精度な地表面データの取得が可能となる。
- (6) PDOPとは、GPS衛星の測定における上空配置状況の良否を表す単位のない指標で、値が小さくなるほど良好である。
- (7) 等高線自動発生のアルゴリズム。等高線はTINの境界線を線で結ぶことにより生成する。したがってそれぞれの等高線の節はかららずTINの線上に発生する。生成した等高線は後の変換エラー等を防止するためスプライン曲線ではなく単純な連続線分を採用した。

第4章

鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群 墳丘測量調査

(ゴーランド・コレクション調査プロジェクト)

1. はじめに

今回の調査は、現在、本学・京都府立大学・大手前大学・大手前大学史学研究所を中心に行っているゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環である。ゴーランド・コレクションとは、イギリスの大英博物館に保存されているウイリアム・ゴーランド（1842–1922）が、1872（明治5）年～1888（明治21）年の16年に渡る日本滞在期間中に蒐集した須恵器・馬具などの実物資料や古墳撮影写真や計測資料といった考古資料の一群である。このプロジェクトは、海外に所在する日本の古墳時代遺物の基礎資料化、及び調査記録データの共有化を通じて日本の古墳時代研究の多様化と国際化を目指すものである。そのため、このプロジェクトでの主な作業は、コレクション内にある古墳出土資料の網羅的・総合的研究を行うとともに、ゴーランドが残した日本各地の古墳の測量図や写真記録についても、資料を観察・図化することであり、そうすることによって現在の古墳時代研究の水準で、ゴーランド・コレクションを再評価すること目的としている。

鹿谷古墳群についても、2010年度より、大市支群Ⅲ-1～5号墳、茶ノ木山支群18号墳について、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーと本学で墳丘測量調査を行ってきた。本年度は加えて、大市支群Ⅳ-1・4号墳とその周辺も測量した。本報告書では、大市支群のⅢ・Ⅳ群をまとめるとともに、茶ノ木山支群18号墳の現時点での調査進行状況を報告する。なお鹿谷古墳群の古墳名称は、龍谷大学考古学研究会が作成したものに従う⁽¹⁾。

2. 地理・歴史的環境（図9）

鹿谷古墳群が所在する亀岡市は旧丹波郡南部に含まれ、丹波の入り口に位置することから口丹波と呼ばれることもある。亀岡盆地を囲むように丘陵が位置しており、盆地のほぼ中央を大堰川・保津川が流れる。盆地から北方へ進むと北丹波・丹後・日本海地域に、西方に進むと西丹波・篠山地域に、南方に進むと北摂津に抜けることが

でき、交通の要衝として重要視されていたと考えられる。亀岡盆地と周辺の丘陵には、さまざまな時期の古墳が数多く分布している。古墳時代各時期の主な古墳や周辺の遺跡について見ていく。

古墳時代前期では、丹波全域で見ると、4世紀後半に築造された園部の垣内古墳（前方後円墳・長82m）が有力古墳としてあげられる。亀岡市内では、南部の山城～丹波に入る主要道路である古山陰道を眼下に望む交通の要衝に、向山古墳（円墳・長32m）が築造される。前方後円墳ではないが、1926（昭和元）年の土取りの際に、だ龍鏡、石釧、車輪石、銅鏡、鉄鏡、直刀、鉄劍、鉄斧、鑿、鐵板片（以上すべて東京国立博物館所蔵）などの豊富な遺物が出土した。これらの遺物により、古墳の築造年代は4世紀末とされる。この古墳の他にも、北部の池尻古墳群と西部丘陵裾の穴太古墳群でこの時期に古墳の築造がはじまつたと考えられている。

中期になると、丹波最大の古墳である雲部車塚古墳（前方後円墳・長140m）が西丹波に築造されるが、その他には、目立った前方後円墳は見られない。亀岡市内では、主に東部の平地に円墳や方墳が築造される。方墳の数がやや多く、東部に朽塚古墳・瀧ノ花塚古墳、北東部に坊主塚古墳・天神塚古墳、北西部に馬場ヶ崎1・2号墳というように、盆地内の平野部の各拠点に方墳が2基並んで築造される特異な分布状況を呈する。また、この時期に鹿谷古墳群南部の平野に位置する鹿谷遺跡に集落が形成されはじめる。

後期になると、6世紀前半にこの時期の丹波最大の古墳である千歳車塚古墳（前方後円墳・長88m）が盆地北東部の平地に築造される。墳丘は3段築成で左くびれ部に造出を持ち、外表施設として葺石、埴輪、盾形周濠を備える。また、墳丘と周濠ともに左右非対称であることが特徴である。千歳車塚古墳と同じ6世紀前半には、行者山北西部の丘陵の平地寄りに、石棚付石室を持つ拝田16号墳（前方後円墳・長44m）が築造される。和歌山県の岩橋千塚古墳群中の古墳に見られるような、小さく扁平な石材を積み上げた横穴式石室を持つ。この石室は、亀岡盆地内でも古い様相を持つものの1つである。またこの時期には、盆地南東部の丘陵上に石堂古墳（前方後円墳・長37m）や南西部丘陵上の穴太12号墳（前方後円墳・長28m）などの30～40m規模の前方後円墳が盆地内に点的に築造される。後期後半になると、盆地を囲むように位置している丘陵上の至る所に群集墳が築造される。分布の多い場所として、北東部の丘陵、南部の曾我部町

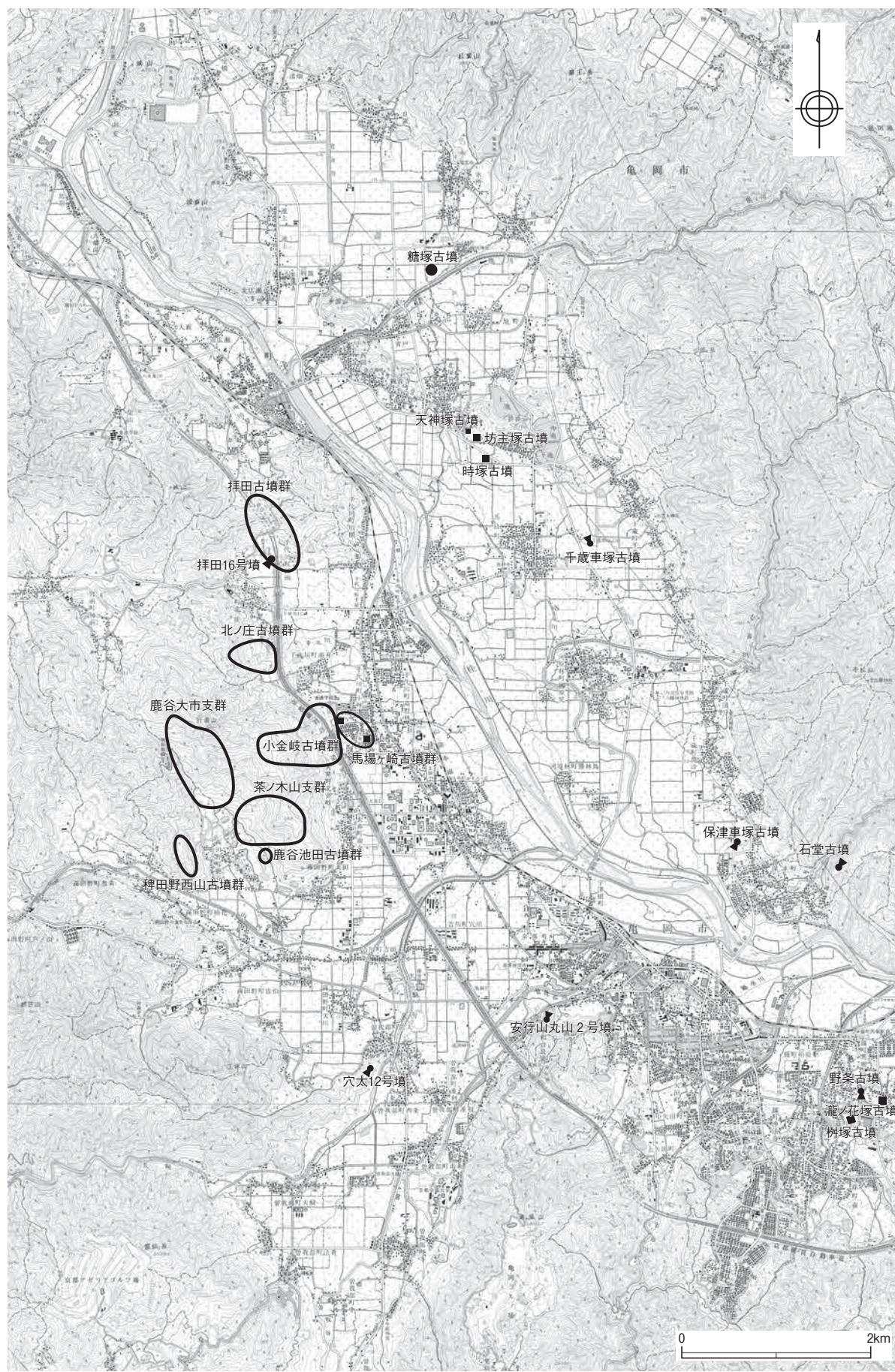


図9 鹿谷古墳群及び関連古墳分布図



写真9 鹿谷古墳群大市支群IV-1号墳墳丘（南南西より）



写真10 鹿谷古墳群大市支群IV-1号墳石室開口部付近（西より）



写真11 鹿谷古墳群大市支群IV-1号墳石室羨道（東より）



写真12 鹿谷古墳群大市支群IV-1号墳石室羨道（西より）



写真13 鹿谷古墳群大市支群IV-1号墳石室玄室（東より）



写真14 鹿谷古墳群大市支群IV-1号墳墳丘と北側掘割り（西より）

付近の谷を挟んだ丘陵付近、西部の行者山麓付近があげられ、特に行者山麓には、鹿谷古墳群や小金岐古墳群中の石棚を持つ古墳や、小金岐1号墳・拝田9号墳の石障、北ノ庄13・14号墳の導入期の石室など、九州系の要素を持つ横穴式石室が集中して分布することが特徴である。

亀岡盆地内の後期群集墳の特徴の1つに、石棚付石室を持つ古墳が複数存在することがあげられる。これらの古墳については、ゴーランド自身も注目し調査を行っており、鹿谷古墳群を考える上で重要な要素となるので、簡単に触れておく。

石棚とは、横穴式石室の奥壁から室内に板石を突出させ棚状の施設を形成している状態を指し、西日本の限られた地域に分布する。これまでに、福岡県、熊本県、大分県、広島県、岡山県、愛媛県、徳島県、香川県、兵庫県、京都府、大阪府、奈良県、和歌山県、滋賀県、福井県で計約160基の分布が確認されている⁽²⁾。この中で分布が集中する地域として、北九州、和歌山県の岩橋千塚古墳群周辺、瀬戸内、徳島県の吉野川中流域、京都府亀岡市行者山麓付近、福井県の敦賀平野周辺があげられ、特に岩橋千塚古墳群周辺には、現在確認されている石棚付石室の約半数近くが集中する。

亀岡市内には、拝田16号墳、小金岐76・78・112号墳、鹿谷古墳群中の18号墳、同大市支群のIV-1号墳他2基の計8基の石棚付石室が所在する。全国的に見ても特に分布の集中する地域の1つに数えられる。さらに、8基すべてが亀岡市西部の行者山麓付近に集中して分布している。亀岡市内には、平野部を囲むように丘陵が位置しており、それらの丘陵のいたるところに後期古墳が分布しているが、石棚付石室を持つ古墳が存在するのは、行

者山麓付近のみである。このような特徴的な分布が何を示すのかは明らかになっていない。

古墳以外では、鹿谷古墳群の分布する丘陵の南にある平野に位置する鹿谷遺跡において、古墳時代のものを中心に約100棟の竪穴式建物跡が発見されている。この遺跡からは、カマドを持つ住居跡や韓式系土器などが出土している⁽³⁾。

3. 既往の調査

鹿谷古墳群は、亀岡市稗田野町大字鹿谷北部の行者山南麓周辺に所在する。この古墳群は、東側の丘陵頂部から西に向かってのびる尾根の裾付近に位置する鹿谷古墳群茶ノ木山支群、同じ尾根の南部裾に位置する鹿谷池田古墳群、反対の西側丘陵頂部に位置する稗田野西山古墳群、そして2つの丘陵の谷間から丘陵尾根稜線付近に位置する鹿谷古墳群大市支群の4つを合わせて鹿谷古墳群とされる。ウイリアム・ゴーランドが調査し、その折に作成した記録や出土遺物がイギリス・大英博物館のゴーランド・コレクション内に保存されていることで著名であるが、その直前に地元民によって独自に発掘が行われ、詳細な絵図面が作成されている。まずはこれらの経緯について記述を進める。

1881（明治14）年4月、鹿谷古墳群の内、北東の茶ノ木山の丘陵頂部に位置する古墳1基（現在鹿谷18号墳の呼称が使用されている）が、鹿谷村民により発掘された。この時に遺物が発見されたために、京都府知事宛てに届書が提出され、同年5月に京都府より派遣された役人と絵師の2名がその状況調査と記録のために村を訪れた。この時は雨天であり、発掘された古墳には入れなかった



写真15 鹿谷古墳群大市支群IV-4号墳墳丘部石材群(南西より)



写真16 鹿谷古墳群大市支群IV-4号墳(南より)

が、周辺にある同じような古墳の石室に入るなどとともに、発掘した村人に発掘時の状況などの聞き取り調査を行い、書類や絵図を作成している。この調査の後に鹿谷村の古墳の発掘の話を聞いたゴーランドが、同年の内に村を訪れたと見られるが、発掘された古墳は、遺物を石室内から移動した直後に嵐によって崩壊したらしく、ゴーランド自身は調査の際に詳細な計測や石室内の写真撮影はできなかったようである。しかし、他の3基の石棚付石室を持つ古墳と3基の横穴式石室墳の計6基の計測を行い、石棚付石室3基については写真撮影を行った。また、MIDODUKAと書かれた石棚付石室1基の実測図を残している。発掘された古墳の副葬品類は豊富で、石室の各所から小玉、耳環、大刀、脚付の子持有蓋壺、金銅装の馬具が出土したとされ、これらの一部は後にゴーランドの手に渡り、大英博物館に収められゴーランド・コレクションとして保存される。

上記の一連の調査の際に作成された書類や絵図やゴーランド自身がそれらを写し取った資料などの一部は、京都国立博物館の考古資料部門とイギリス大英博物館のゴーランド・コレクション内に伝わっている。京都府から派遣された絵師が完成させた図面が、当時の水準からすると考古学的な学術性が非常に高く、現在から見ても有用な資料であることから、絵師が図面を描く際に考古学的知識を持つゴーランドが何らかの形で関わった可能性が指摘されている。また、ゴーランドの持つ図面は絵師が描いたものであるから、ゴーランドと絵師の間に直接的な関わりがあったことは確かなようである⁽⁴⁾。

ゴーランドらが行った調査以降、発掘が行われた古墳や3基の石棚付石室を持つ古墳は、茶ノ木山の名が廃れたために、その所在は長らく掴めないままであった。しかし、2009（平成21）年、龍谷大学考古学研究会が亀岡市稗田野町鹿谷一帯の古墳分布調査を行ったところ、これらの古墳の内、使用石材の特徴がゴーランドの撮影した写真と似ることから、稗田野町鹿谷大市所在古墳について、かつてゴーランドが内部を撮影した石棚付石室を持つ古墳である可能性が考えている⁽⁵⁾。同研究会はその他にも、ゴーランドによって調査された石棚付石室を持つ古墳周辺にて、分布調査により約40基の古墳及び古墳状隆起を確認しており、この付近を鹿谷古墳群大市支群と設定した⁽⁶⁾。

2010（平成22）年度には、本学の一瀬和夫がメンバーに入り、現在、大英博物館他と進めている、ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの一環として、石棚

付石室を持つ古墳の下方に集中する古墳5基（大市支群Ⅲ-1～5号墳）について、墳丘測量調査を行った⁽⁷⁾。

2011（平成23）年も引き続きゴーランド・コレクション調査プロジェクトのメンバーと本学で、昨年の5基の古墳周辺の測量調査の補足を行い、それぞれの古墳の詳細が判明した。詳細は以下の通りである。

大市支群Ⅲ-1号墳：円墳、南北約15m・東西約13m、高さ約3.8m、横穴式石室。

大市支群Ⅲ-2号墳：方墳、辺約12m、高さ約3.4m、横穴式石室。

大市支群Ⅲ-3号墳：円墳、径約10m、高さ約2.8m、横穴式石室。

大市支群Ⅲ-4号墳：円墳、径約14m、高さ約5m、横穴式石室？。

大市支群Ⅲ-5号墳：円墳、径約12m、高さ約2m、横穴式石室。

さらに2012（平成24）年2月と3月に同メンバーで茶ノ木山支群18号墳の墳丘測量調査を行った。18号墳はこれまで径30m程の円墳と考えられていたが、この調査により、前方部を北に向ける帆立貝式のような前方後円墳である可能性が出てきた⁽⁸⁾。

茶ノ木山支群18号墳の測量調査については本年度も継続中であるが、調査の過程で、1881（明治14）年に描かれた絵図と一致することが分かったので、後で詳細を述べる。

4. 2012年度の大市支群Ⅳ-1・4号墳の調査

調査の方法

調査は平板測量を行い、測量図は20cmセンター、縮尺1/100で作成した。基準杭は世界測地系に基づいてⅣ-1・4号墳周辺に計7点設置した。それぞれの基準杭の数値は以下の通りである。

A-13 : X=-107163.008, Y=-43228.661, Z=193.000。

A-14 : X=-107156.778, Y=-43213.065, Z=194.232。

24A-1 : X=-107135.293, Y=-43216.037, Z=199.549。

24A-2 : X=-107118.177, Y=-43225.909, Z=204.983。

24A-3 : X=-107086.558, Y=-43239.152, Z=218.207。

24A-6 : X=-107103.164, Y=-43244.032, Z=214.932。

24A-8 : X=-107144.412, Y=-43245.275, Z=202.335。

水準の数値は、京都府亀岡市稗田野町鹿谷西川23-5に所在する2級基準点Ⅱ-1の標高122.935mを参照した。測量を行った範囲は、Ⅳ-1・4号墳周辺を中心に南北

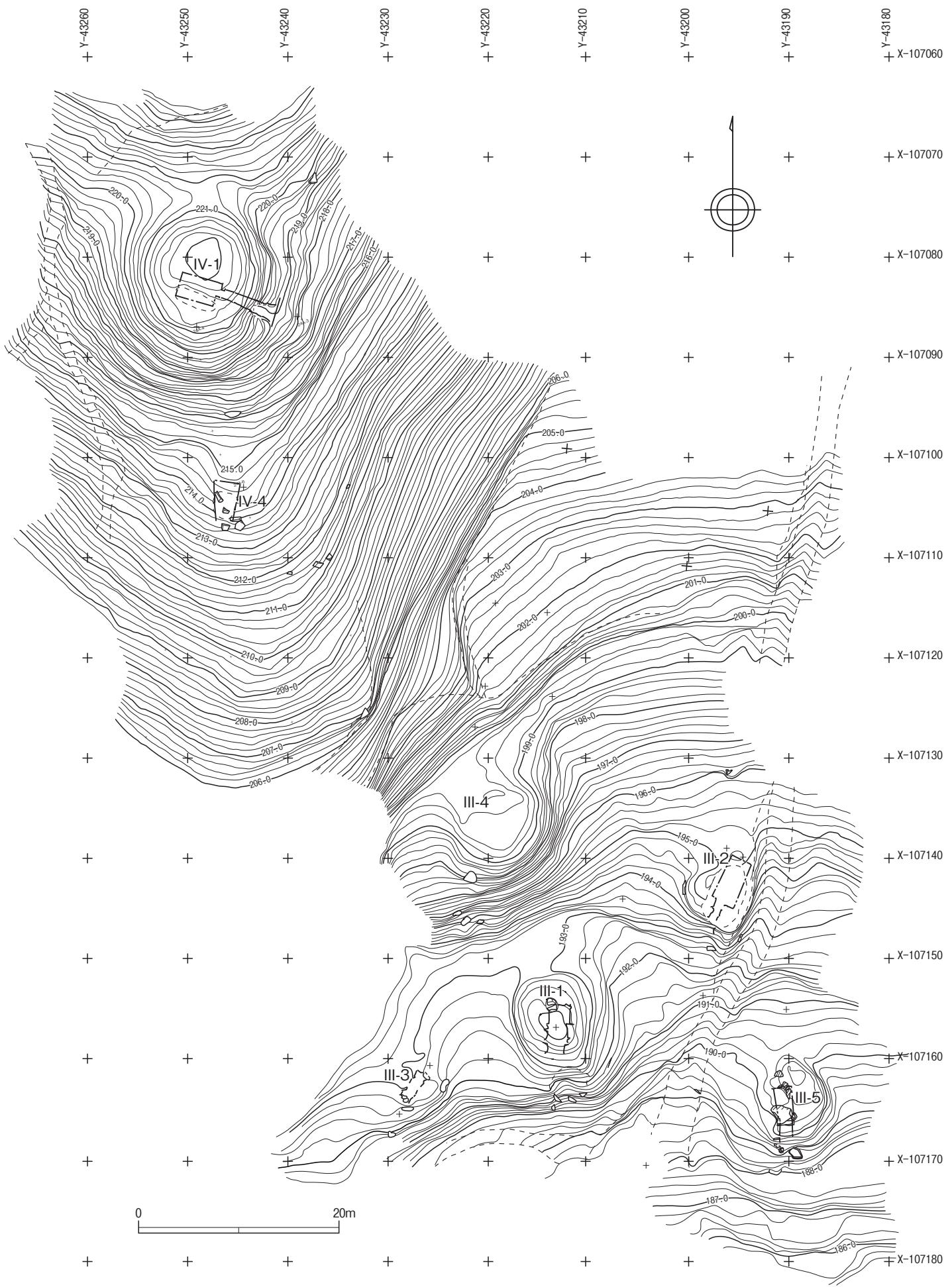


図10 鹿谷古墳群大市支群III・IV墳丘測量図

約67.5m、東西約43m、総面積約2902.5m²となった。調査期間は2012年8月7~10日・12~15日・17~20日である。

以下に、調査によって得られた成果を基に、各古墳の詳細を中心に整理していく。

IV-1号墳

立地：丘陵斜面に位置する。この古墳より下方の地形は、尾根が2つに分岐しており、その分岐の頂部にあたる。墳丘の約3m西側には崖がある。また、IV-4号墳から見たら腰高な印象をうける。

墳丘：円墳、墳径南北約22m・東西約24m、周溝を含めた全径南北約24m・東西約25m、高さ（平野側・南）側約6m・（丘陵側・北）約1.2m。

T.P.216.000m付近までコンターが回り、これより下方の斜面が緩やかになるので、この付近を墳丘裾とした。他の古墳と比べ丘陵側の墳丘はきれいに整形される。墳

頂部に南北約1.5m・東西約4mの石室の陥没孔がある。墳頂平坦面は約10mとする。丘陵側のT.P.220.400~223.000付近に丘陵切断痕とみられる傾斜変換ラインに入る。

外表施設：林道と重複する可能性もあるが、丘陵側を中心半円形に幅約2mの堀割りが回る。平野側の墳丘裾周辺は盛土が流出している可能性があり、この付近に溝が回るのかは不明である。また、墳丘南側斜面中央付近のT.P.217.600~218.800m付近は他の部分と比べ斜面が緩やかになるため、テラスが入る可能性がある。葺石は見られない。

内部構造：横穴式石室、東方向に開口、石棚付石室。

IV-4号墳やIII-1~5号墳などの周辺の古墳の石室と異なり、東側に開口する。開口部付近の墳丘は東側に向かって膨らんでいる。また、石室内は天井石が崩れている。

特徴：大市支群中最大規模の古墳であり、突出した規模の墳丘、東側に開口する石室など周辺に分布する古墳と異なる要素を持つ。

IV-1号墳東側の斜面付近について

IV-1号墳の東側の斜面は、測量図に点線で表したように、石室開口部付近を中心に東に向かって谷状に窪んでおり、下方に行くほど幅が広がっていく地形になっている。このことから、墓道が存在する可能性が考えられる。また、斜面下部の傾斜は他所より急であり、斜面から平坦面に変化するラインも直線的であることから、後世に人工的な改変があった可能性がある。この平坦面付近からは、調査中に須恵器片が散布しているのが確認されている。

IV-4号墳

立地：丘陵斜面に位置する。IV-1号墳とは近接しており、重複する可能性もある。

墳丘：円墳、径約14m、高さ約3m（平野側）。墳丘盛土は大幅に流出しているために現状ではかなり不明瞭だが、T.P.212.000m付近で傾斜が緩やかになることから、この付近を墳丘裾とした。丘陵側の墳丘はあまり整形していない。特に、墳頂部付近の盛土が多く流出しており、石室構築石材や石室内部と思わ

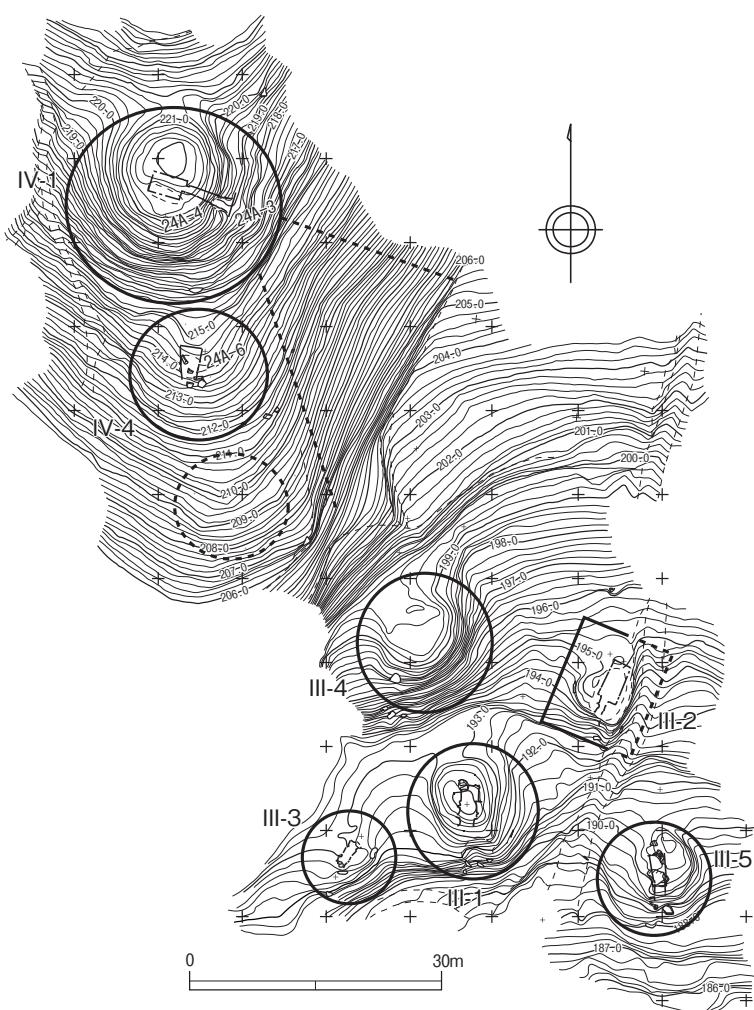


図11 鹿谷古墳群大市支群III・IV墳丘復元図

れる窪みが露出している。

外表施設：段築・葺石・周溝などは見られない。

内部構造：横穴式石室、南方向に開口。

墳頂部付近には、大きさ1m程度の石室構築石材と思われる石が5個ほど散乱し、それら周辺の墳丘は落ち窪んでいる。また、墳丘裾推定ライン付近には同じく1m大の石材が点在しており、この古墳の石室石材が流出した可能性も考えられる。

特徴：墳丘はかなり流出しているが、近接するIV-1号墳と異なり、付近の大市Ⅲ支群中の古墳と類似する規模を持つ。

IV-4号墳南側の斜面について

IV-4号墳下方の斜面には、肉眼では古墳と推定できるような墳丘状の地形は見られないが、東側斜面付近を中心に1m大の石材が点在する。さらに測量図では、わずかではあるがT.P.207.400～210.600付近のセンターが変化しているように見られる。これらの要素から、測量図中に点線で囲んだ部分に径約10mの古墳が存在する可能性があることを指摘しておく。

5. 2012年度茶ノ木山支群18号墳周辺の調査

調査方法など

調査は平板測量を行い、測量図は25cmセンター、縮尺1/100で作成した。基準杭は世界測地系に基づいて18号墳周辺に計11点設置した。それぞれの基準杭の数値は以下の通りである。

基-1 : X=-107459.757, Y=-42348.049, Z=268.925。
基-2 : X=-107461.136, Y=-42343.956, Z=269.508。
T-1 : X=-107454.174, Y=-42375.764, Z=273.176。
T-2 : X=-107450.788, Y=-42403.961, Z=276.791。
T-3 : X=-107458.600, Y=-42421.587, Z=281.836。
T-4 : X=-107470.167, Y=-42421.952, Z=281.644。
T-5 : X=-107466.305, Y=-42414.789, Z=281.580。
T-6 : X=-107458.831, Y=-42398.836, Z=276.457。
T-7 : X=-107459.526, Y=-42369.450, Z=271.731。
T-3-1 : X=-107441.777, Y=-42427.543, Z=277.398。
T-4-1 : X=-107468.555, Y=-42440.595, Z=276.679。

測量を行った範囲は、18号墳周辺を中心に、現時点で南北約67.5m、東西約66m、総面積約4455m²となる。昨年度と本年度の調査期間は、2012年2月12日・3月18～20日・11月23日・12月29・30日、2013年3月23日である。18号墳の測量調査は現在も継続中であり、今回は出来上

がっている墳頂部付近の図を提示し、明治時代に作成された18号墳のものと思われる古墳の絵図と比較検討した結果をここに報告する。墳丘全体の調査成果は、次年度にまとめて報告する予定である。また、調査期間中に茶ノ木山支群の踏査を行い、行者山西側丘陵尾根上にて2基の古墳を確認したのでそれらの概要についても報告する。

茶ノ木山支群18号墳

上記の通り18号墳の測量調査は現在も継続中であり、今回記述する数値などは、現時点での状況である。

立地：丘陵尾根頂部に位置する。尾根が丁度北から東に曲がる角の部分にあたり、墳頂からは、南側の鹿谷の平野部が見渡せる。古墳の立地する丘陵の南側平野には、亀岡盆地から西の丹波・篠山へ抜けるルートが通り、このルート上の要衝を意識した立地と言える（写真3はこのルートからの遠望、中央尾根上でひと際目立つのが茶ノ木山である）。

墳丘：円墳か前方後円墳、円丘部東西径約38m、同高さ約5m。

北西側の墳丘は崖で崩れている部分もある。東西の墳丘裾周辺の地形は平坦面となっており、墳丘築造前に地面を整地した可能性が考えられる。北側に後述する前方部のような突出した地形が認められる。

前方後円墳の可能性：円丘部の北側に、長さ約20m・幅約10m・高さ約2.3mの突出部がある。この突出部は中ほどの東西両側の地形が崩れており、東側には多数の石材が散乱する。今回は測量調査のみなので、この突出部が前方部となるのか、あるいは自然地形なのかは断定できない。また、茶ノ木山周辺には、土壘などの後世の城郭関連遺構が所々に分布しており、これらによる改変を受けていることも考慮しなければならない。

外表施設：円丘部には1～2本のテラスが回る可能性がある。1本目は、T.P.280.000～281.000m付近の傾斜が緩やかになる部分に当たる。この部分は石室の陥没孔開口部の底面のレベルと同じであり、石室開口部付近の詳細を知る上で検討する必要がある。2本目は、墳丘裾よりわずかに上部のT.P.277.000～280.000m付近を回るが、北西側で途切れる部分があり、全周しない可能性が高い。2本目のテラスより下方の墳丘は他の部分より急斜面であり、この斜面に沿って、大形の石材が点在する。

内部構造：横穴式石室、南側に開口、石棚付石室。

石室は墳頂部の陥没孔から南の平野部に向けて開口す

ることがわかる。

絵図との比較：京都国立博物館には、1881（明治14）年に茶ノ木山で古墳の発掘が行われた際に作成された絵図が複数保存される。その中の1枚に「茶ノ木山ノ峯ニアル古墳直上ヨリ見ル圖」と題された1基の古墳を真上から見た構図で描かれた平面図がある（写真21）。この絵図は、茶ノ木山の古墳を発掘した時に遺物が出土したため、京都府の仕事として派遣された半井真澄に随行して出向いた絵師・遠藤茂平によって描かれたものである。

ゴーランド・コレクション調査プロジェクトの調査過程において、この絵図と18号墳の類似点が発見され、18号墳を測量し、今回2枚の図面（18号墳は墳頂部付近のみ：図13）を合わせて並べ、比較・検討した。その結果、複数の類似点が見いだせたので、下記に列挙する、

第1点として、絵図中の古墳の墳丘南部の「甲」「乙」

と書かれた石室らしき部分が、18号墳頂部の石室の陥没孔とほぼ一致する。第2点は、絵図中の石室の北にある西側に向かって傾斜する溝と、18号墳の石室陥没孔の北の溝状の落ち込みの形状が類似する。第3点は、絵図中の北側半分に巡る「此筋周囲壇ノ如ク少シ平面アリ」と書かれた部分と、18号墳北側のT.P.279.000～280.000付近のテラスと推定される傾斜が緩やかな部分がほぼ一致する。以上の類似点から、絵図の古墳と18号墳が同一の古墳であることは、ほぼ確定的であると言える。

（仮）No.11の古墳・東尾根側先端（図12）

立地：行者山西麓の龍潭寺から、東へ向かって急斜面をのぼり、丘陵尾根稜線先端の傾斜が少し緩やかになった地点に単独で位置する。現地は木々が覆い茂っており、眺望具合はわからないが、かなり良好そうである。



写真17 鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳（東より）



写真18 鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳 突出部（南東より）



写真19 鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳
手前が突出部、奥が円丘部（北東より）



写真20 鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳 墳頂部（南より）

墳丘：円墳、径約25m。

墳頂平坦面が広く、鹿谷古墳群中で多く見られる截頭円錐形の墳丘ではない。

外表施設：葺石・段築は見られない。北側に周溝の一部と思われる地形が存在する。

内部構造：不明

上記のように、墳頂平坦面が広いので竪穴墓壙の埋葬主体の可能性も考えられる。

特徴：径約25mと他の古墳と比較して大きめであり、尾根稜線先端部の単独的な立地や扁平な墳丘、さらに竪穴系埋葬施設を持つ可能性があることから、古墳群中に多く分布する横穴式石室を持つ古墳とは時期差があるかもしれない。

(仮) No.12の古墳・尾根南端 (図12)

立地：No.11の古墳から尾根稜線に沿って進み、尾根が北側に曲がった地点付近に位置する。南側の平野部が良く見渡せる。

墳丘：円墳 径約12.5m。

墳丘は半壊している。

外表施設：葺石・段築・周溝は見られない。

内部構造：不明

特徴：南側の平野部を見渡せる好立地に所在する。

6. おわりに

今回の調査によって、大市支群IV-1・4号墳周辺の詳細が判明した。前回測量したIII-1~5号墳周辺の図

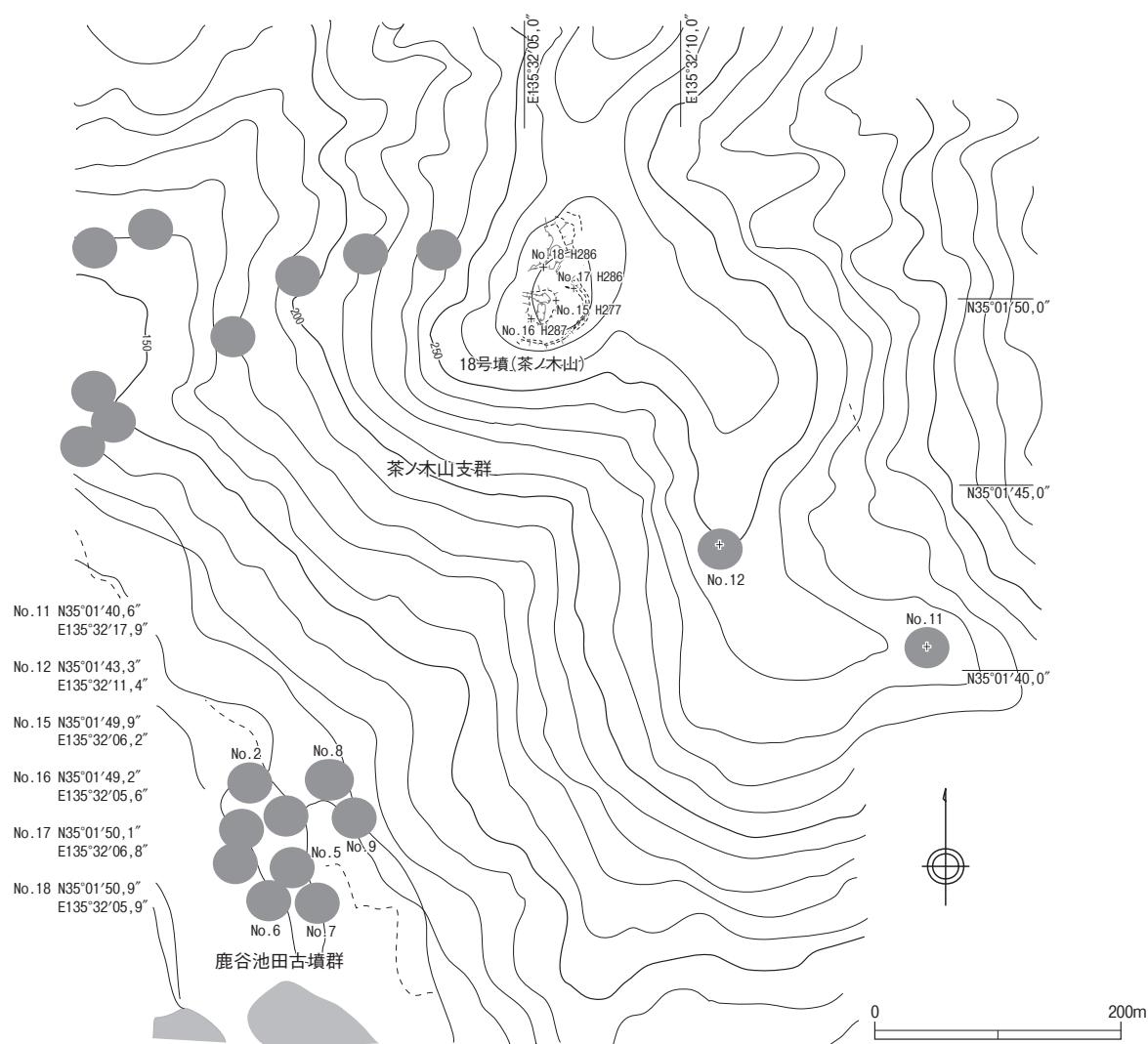


図12 鹿谷古墳群茶ノ木山支群とその周辺古墳の分布図

面と合わせて、大市支群中でも比較的残存状況の良い地区的詳細な測量図を提示することができた。特にIV-1号墳は支群中最大規模の墳丘や石棚付石室を持つこと、墓道と思われる開口部付近の地形など、特筆すべき点が多く、鹿谷古墳群全体での位置付け、亀岡盆地内の他の有力古墳との比較・検討などが必要である。

茶ノ木山支群については、調査途中といふこともあり、現時点では判明している内容の概要を述べる程度になってしまった。しかし、18号墳が明治時代の茶ノ木山の発掘の際に作成された絵図に描かれた古墳と同一であることがほぼ確定的となり、重要な新事実を発見することができた。また、18号墳は円丘部だけでも径約38mあり、墳長約50mの前方後円墳であるとすれば、同時期の亀岡盆地内の古墳の中でも屈指の規模を持つ古墳になる。早急に測量図を完成させ、同時期の周辺地域の古墳との比較などを行い、

盆地内での位置付けや意義を探っていく必要がある。

2010年度からの鹿谷古墳群での測量調査から、茶ノ木山18号墳や大市支群IV-1号墳などの古墳群中でも突出

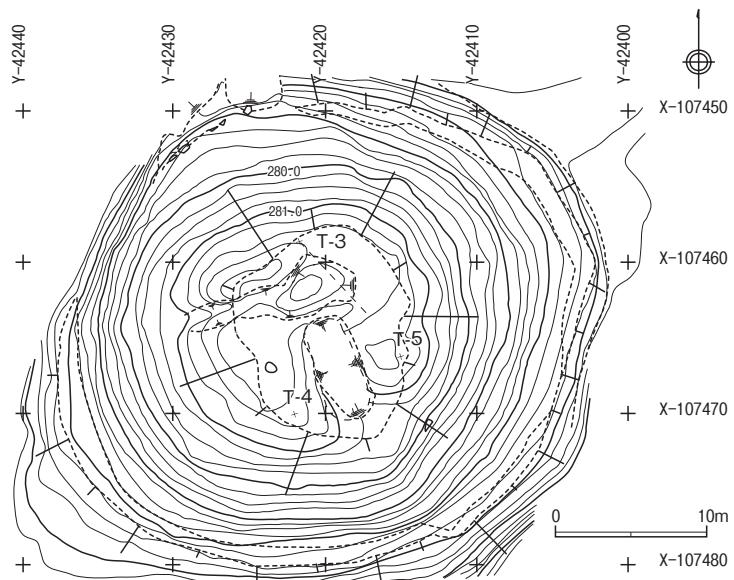


図13 鹿谷古墳群茶ノ木山支群18号墳頂平面図

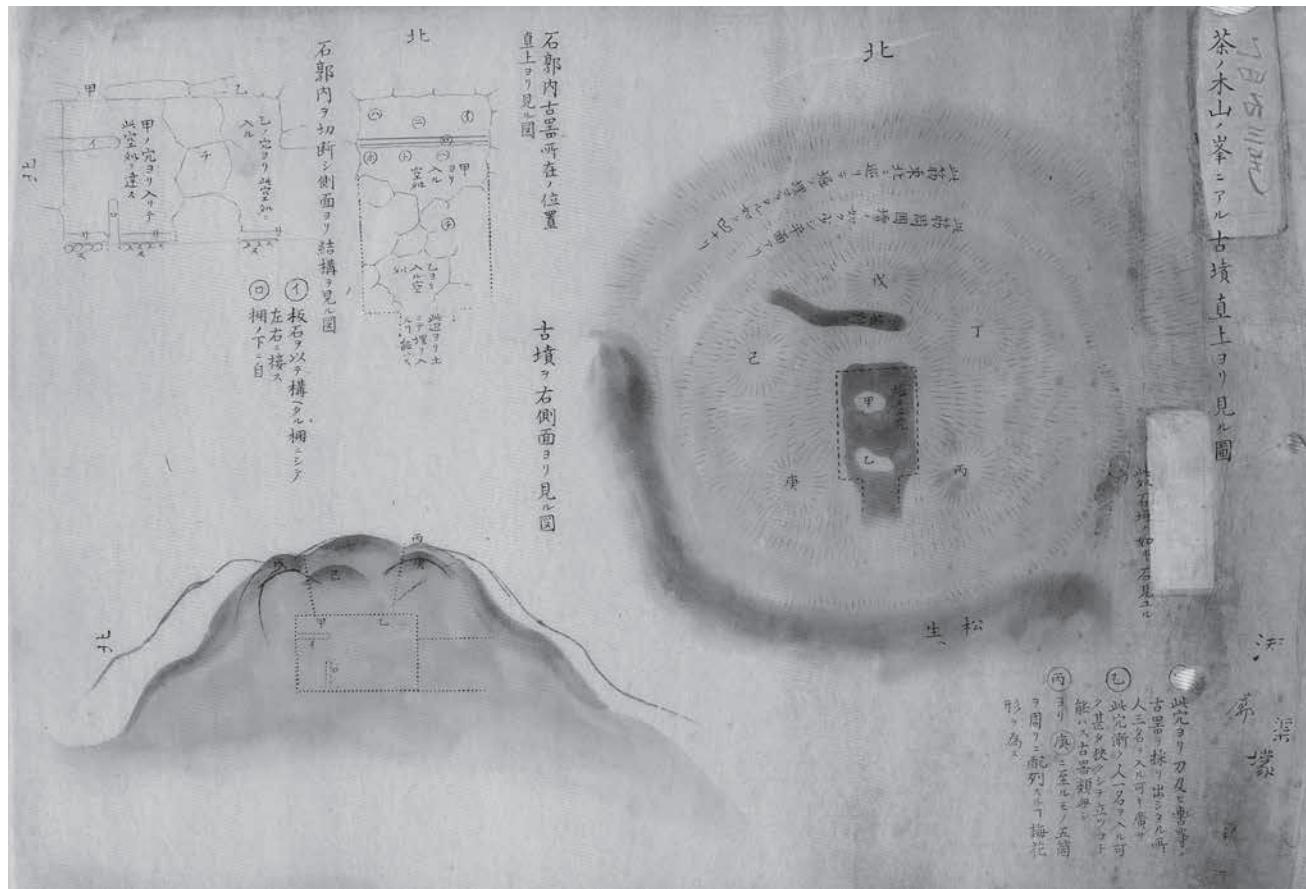


写真21 鹿谷古墳群茶ノ木山支群 茶ノ木山ノ峯ニアル古墳図・墳丘及び石室図（京都国立博物館提供）

した規模と石棚付石室などの特徴的な内容を持つ古墳や、(仮) No.11古墳や(仮) No.12古墳などの尾根稜線上に単独で分布する古墳、それ以外のⅢ-1～5号墳やⅣ-4号墳などの比較的均一的な古墳など、同古墳中には様々な内容を持つ古墳が分布していることが明らかになってきた。これらの成果をもとに、群構成や群中の階層性、さらに鹿谷古墳群を含む行者山山麓に分布する石棚付石室などの特異な石室を持つ古墳の位置付けなど、今後の課題となる要素について研究を進め、理解を深めていきたい。

なお、測量図にも記載されているが、大市支群Ⅲ-1～3・5号墳とⅣ-1・4号墳については、石室実測図も作成されている。これらの成果については、後日別稿にて報告する予定である。

注

- (1) 龍谷大学考古学研究会2011「京都府亀岡市所在鹿谷古墳群大市支群分布踏査」『古代学研究』192号 古代学研究会

- (2) 河上邦彦1995『後・終末期古墳の研究』雄山閣出版
(3) 亀岡市の地理・歴史的環境については、亀岡市史編纂委員会2000『新修亀岡市史』通史編第1巻 亀岡市を参考にした。
(4) 明治時代にゴーランドらが行った調査については以下の文献を参考にした。
富山直人2009「ガウランドと鹿谷古墳—大英博物館所蔵資料の調査から—」『日本考古学』第28号 日本考古学協会
土井孝則2010「石棚古墳の研究（3）—ガウランドが撮影した鹿谷古墳とその所在—」『亀岡古墳研究』No.1 亀岡古墳研究会
宮川禎一2005「描かれた古墳出土品—明治14年の発掘調査—」『学叢』第27号 京都国立博物館
京都橘大学文学部2011『京都橘大学文化財調査報告2010』
(5) (1) に同じ。
(6) (1) に同じ。
(7) 京都橘大学文学部2011『京都橘大学文化財調査報告2010』
(8) 京都橘大学文学部2012『京都橘大学文化財調査報告2011』

第5章

近江湖西地域の横穴式石室 －石室の規模と石積み－

1. はじめに

近江湖西地域は琵琶湖の西側で、現在の瀬田川から西の大津市、高島市にあたる（図14）。その西側には比良山地や比叡山系などの山々が連なっている。

本章で古墳時代を論ずるにあたって、その時期区分に関しては、3世紀後半～4世紀を前期、5世紀を中期、6世紀以降を後期として記述する。前期は九州・畿内などで大型古墳が造られはじめ、この小地域でも、大津市では膳所茶臼山古墳・和邇大塚山古墳、高島市では田中大塚古墳・熊野本古墳群・王塚古墳群などが造られる。中期になると各地で円墳も造られはじめ、内部主体は基本的には木棺直葬で、数は減るが後期まで築かれしていく。その一方で、九州・畿内などでは横穴式石室を内部主体とする古墳が造られはじめ、これらがその後全国に広まる。このことから中期以降は、これまで九州・畿内などでは古墳の内部主体として、竪穴式石室などの単次葬であったものから、玄室と羨道から成り立つ複次葬の横穴

式石室が出現する。被葬者は、地域の首長に限られていたのが、地域内部の有力家族が葬られるようになる。これらの要因も重なり、横穴式石室は全国に広まって、様々な地域で造られていく。

近江において野洲川流域を中心とする湖南地域は、近江のなかでも広い規模の平野部を持っており6世紀前半あたりから横穴式石室墳が多く造られ、首長墓や群集墳が多くみられる。玄室の長さと幅の比率が2：1である畿内型石室が多く存在している。野洲市の円山古墳では、右片袖式の平天井構造であり小さく持ち送られている⁽¹⁾。この古墳と甲山古墳の大型古墳を受け継ぐとされる宮山1・2号墳のように首長墓の横穴式石室を受け継ぐ古墳もあるため、首長墓と中小規模墳が関連していたとされている⁽²⁾。

湖東地域は、玄室と羨道のあいだが階段状になっており、玄室が1段程度下げられた構造の階段式石室が多い⁽³⁾。階段の部分を石材だけで構成しているものなどは、玄室床面と羨道床面に置かれる。この石室は、竜王町の三ツ山古墳群などに造られている⁽⁴⁾。この古墳群は、羨道が玄室より50～80cmほど高く造られ、それらの境に石材を並べている。

湖北地域は、横断面がドーム状を呈する横穴式石室であり、四郷崎古墳はその例の1つである。これは墳丘が円墳で、横長長方形の形をした玄室の上部は急激な持ち送りとなる⁽⁵⁾（図15）。玄室の天井がドーム状天井構造になるのは、肥後型石室と呼ばれる横穴式石室にもあるが⁽⁶⁾、玄室が正方形であり、横長長方形や縦長長方形ではない。

本章で取り扱う湖西地域の横穴式石室の多くは古墳時代後期であり、九州・畿内の地域に比べて少し遅れ、5世紀末から6世紀前半にかけて出現していく。6世紀後半には多く採用され、この時期には小規模な円墳が家族や氏族の関係で構成され、1ヶ所に集中して築かれる群集墳を形成し、内部主体は横穴式石室主体となる。ただ



図14 近江の地域区分

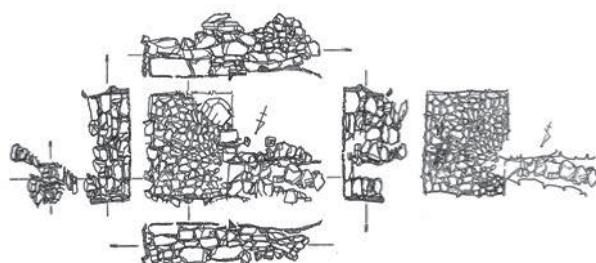


図15 四郷崎古墳の横穴式石室

し、木棺直葬と横穴式石室が同じ群集墳のなかにみられるのは稀なことではなく、穴太野添古墳群・春日山古墳群などのほかに、それらの北側にも多く存在する。また、6世紀前葉や中葉の古墳は少ないが、その時期の内部主体に横穴式石室を持つ前方後円墳もある。この小地域には九州や畿内の影響を受ける横穴式石室があるが、その他にこの小地域特有のものや渡来人系のものもある。

本章では、これら小地域の横穴式石室の形態と構造をとらえ、石積みの状況を確認し、規模の比較を行い検討する。

2. 近江湖西地域の概要

ここでは近江湖西地域の瀬田川から西の大津市を湖西南部地域とし、高島市を湖西北部地域とし、古墳のあり方を概観していく。

湖西地域以外の古墳時代前・中期の古墳のあり方をみると、多くは10数基ほどの前方後円墳が1ヶ所に集まる傾向がある。ところが湖西南部地域では、何基かの前方後円墳が1ヶ所に集中して築かれているのではなく分散する。一方、北部地域においてはこれまで前期古墳と呼べる古墳が確認されていなかったが、近年、確認されるようになつた⁽⁷⁾。ただし、全体に前期古墳の数は少なく、政治的にそれぞれの地域全体を支配できるほどの強大な勢力が見あたらず、中期に入ってから湖西地域で政治的に支配権を持つような首長がそれぞれの場所で出現する。前・中期に造られた古墳を有する古墳群のなかに、後期以降も古墳が築造されているものもある。しかし、その数は少なく、この小地域において後期以前に築造された古墳から少し離れた場所に後期古墳が造られる傾向がある。そのなかには前方後円墳が築かれ、その周辺に後期古墳を築造し古墳群となるものも見られるが、ほとんどは後期

だけ構築される古墳群である。

こうした後期古墳の状況をさらに詳しく南部と北部に分け、地域ごとに内部主体である横穴式石室の主な内容を以下に説明する（図16）。

1) 湖西南部地域

この地域の後期には、様々な場所で100基以上の古墳を持つ群集墳が多く造られる。墳丘形態はほとんど円墳で、一部の国分大塚古墳や春日山古墳群には前方後円墳

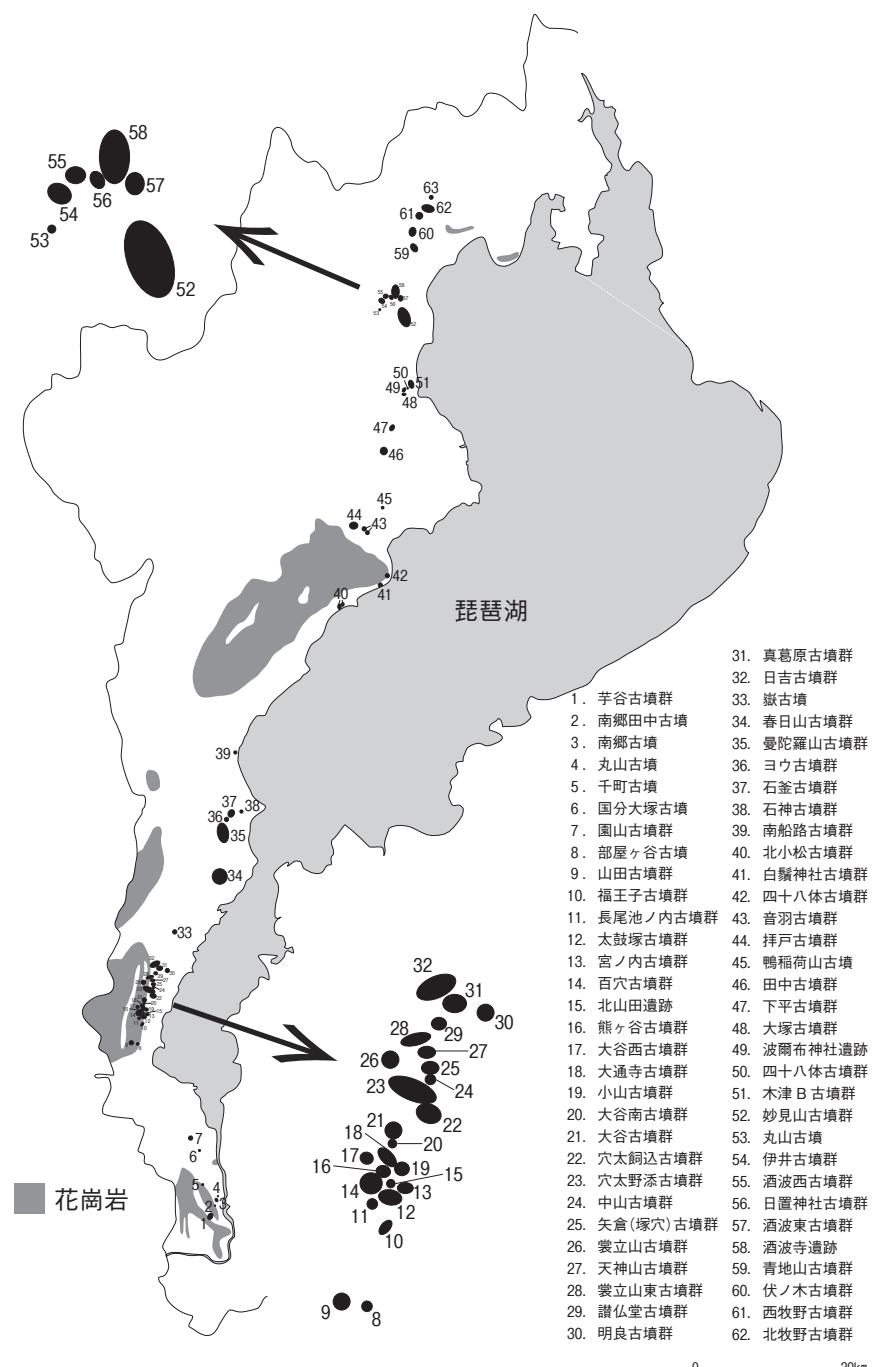


図16 横穴式石室を内部主体とする古墳と花崗岩の分布

が存在する。そして様々な型式の横穴式石室を内部主体とする古墳群が数多くみられる。この地域は、場所によって横穴式石室の構造が異なるため、さらに瀬田川西岸周辺、大津北郊、志賀地域とそれぞれ分ける。

瀬田川西岸周辺には横穴式石室の数が少なく、存在する石室を見ると平面長方形や平天井構造である。6世紀後半に築造された国分大塚古墳は前方後円墳で、前方部と後円部に横穴式石室が存在する。後円部の方が前方部に比べてひと回り大きい構造となっており、湖東の野洲市にある円山古墳の横穴式石室とほぼ同じ形態で、小さく持ち送りをする。園山古墳群においては持ち送りがなく、壁はほぼ垂直に立ち上がる。この区域では、100基以上からなる古墳群はないが、築造開始時期は6世紀末ごろであり、湖西地域にある他の古墳とほぼ同じ時期に築造される。

坂本から滋賀里の大津北郊には平面正方形・平面長方形・ドーム状天井構造の横穴式石室がみられる。この区域では横穴式石室墳が密集して築かれ、ほとんどの古墳群が50基から100基である。大津北郊だけでも600基以上の横穴式石室墳が確認されている。湖西地域において群集墳内にもみられる木棺直葬を内部主体とする古墳は少なく、横穴式石室墳が多い。近江の群集墳のなかで最古の横穴式石室と言われるのが、縦長長方形の横穴式石室の穴太鉢込16号墳である⁽⁸⁾。また、この区域のほとんどの横穴式石室は玄室四周の壁を急激に持ち送り、天井石が1石であるのがほとんどであるため、ドーム状天井構造が多くみられ、通常の横穴式石室で採用される平天井構造は少ない。

堅田・真野から北側の志賀地域では基本的に平面長方形・平天井構造の横穴式石室である。春日山古墳群や曼陀羅山古墳群はそれぞれ100基以上で構成され、古墳の内部主体は、木棺直葬もあるが横穴式石室がほとんどである。2つの古墳群以外にも横穴式石室を内部主体とする古墳群があり、それらは古墳群の数が少なく散在するため、群集墳の体をなさない。ドーム状天井構造の横穴式石室を内部主体とする古墳は少ないが、この区域にも確認することができる⁽⁹⁾。北小松古墳群の周辺には横穴式石室墳が築かれないと、これを基準に湖西地域を南部と北部に分けて考えることができる。

2) 湖西北部地域

南部地域よりも群集墳を構成する古墳群は少なく、それぞれが総数100基に満たず、現在のところ、一番多い

のは、北牧野古墳群の96基である⁽¹⁰⁾。横穴式石室を内部主体とする古墳が最も多く存在する地域は、旧マキノ町域であり、それまで古墳や集落が築かれなかった地域に突然、現われる⁽¹¹⁾。横穴式石室墳の墳丘形態は、前方後円墳の鴨稻荷山古墳を除き、南部地域と同様に大部分が円墳である。しかし、この地域において、後期古墳の内部主体は基本的に木棺直葬をする竪穴墓壙であり、横穴式石室と同じ率で検出される。前方後円墳で横穴式石室を内部主体としているのは鴨稻荷山古墳だけである。この古墳は6世紀前半に築かれており、周辺の古墳群とは違い単独墳で、築造時期も先行する大型首長墓である。しかし、横穴式石室上半が破壊されているため、上部の構造はわからない。その後、6世紀後半になると北部地域では古墳が増加するとともに、横穴式石室墳が、木棺直葬を内部主体とする古墳もあるなかで次第に増加する。

この地域で特徴的な横穴式石室の1つとして田中36号墳があげることができ、玄室の奥壁側に遺骸安置空間を設けている⁽¹²⁾（図17）。この古墳は43基からなる田中古墳群の内の1基である。この古墳群のなかに築造時期が5世紀後半の帆立貝形古墳の田中王塚古墳があり、その他の墳丘形態は円墳である。そのため、この古墳を古墳群の盟主墳として築いたとされる⁽¹³⁾。田中36号墳の玄室は長さ4.5m、幅1.9~2.1mの縦長長方形であり、遺骸

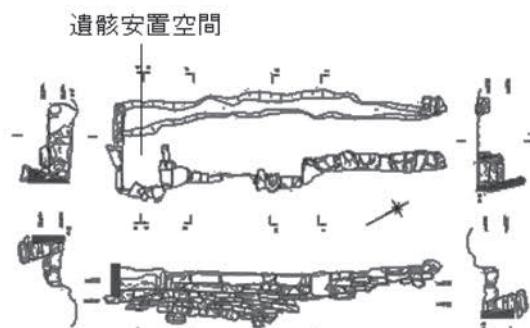


図17 田中36号墳の横穴式石室

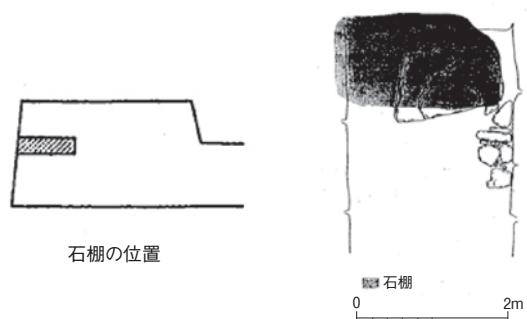


図18 西牧野41号墳の石棚の配置

安置空間は長さ1.1m、幅2.1mの横長長方形である。障壁石（仕切り石）は高さ40~50cmほどであり、床面は玄室床面より10cmほど高く造られ、その空間全体には赤色顔料が塗られていた⁽¹⁴⁾。

次に西牧野41号墳の玄室奥壁には、石棚がつけられている。この古墳を含む47基からなる西牧野古墳群は、この地域において2番目の古墳数を誇っている。この41号墳は斉頬塚古墳とも呼ばれ⁽¹⁵⁾、古墳群のなかでも特徴的なものとして知られている。この古墳の玄室の長さは、4.4~4.9mであり、幅は1.6~2.2mである。その奥壁側に位置している石棚の規模は、奥行き1.2m、幅1.8m、厚さ0.45mの大きさで右側壁面に一端を食い込ませている。床面との間は高さ1.1m前後であり、床面にも長さ0.85~1.4mほどの石が置かれている⁽¹⁶⁾（図18）。このことから、石棚と組み合わさって、遺体を安置する空間を造ったと考えられている。

北部地域は横穴式石室が少ないとや破壊されていることからあまり研究が進まず、また報告書も少ない。これらに他に横穴式石室を内部主体とする古墳はあるものの、詳細はわかっていないのが現状である。

3. 横穴式石室の構造

1) 玄室の平面プラン

横穴式石室の玄室の平面プランは（図19）、長さが幅より短いものをI型：横長長方形、長さと幅がほぼ同じものをII型：正方形、長さが幅より長いものをIII型：縦長長方形と分けることができる。指標としては、玄室長幅比（玄室長／玄室幅）が0.90未満をI型：横長長方形、

0.90以上1.20未満をII型：正方形、1.20以上をIII型：縦長長方形とする。石室の形態は両袖式・片袖式（右片袖・左片袖）・無袖式である⁽¹⁷⁾（表1・2）。

湖西地域全体でみると、表1・2で示している範囲で横穴式石室はIII型の縦長長方形が211基と多い。II型の正方形やI型の横長長方形は42基と、これらは南部地域の大津北郊に多くみられる型式である。また、石室は基本的に南側から東側の間に出入りができる空間の羨道が造られ、琵琶湖が東側に位置し、日の光が取り入れやすいという長所がある。石室づくりや埋葬するのに最適であったと考えられる。

石室の細部については、まず、その上半を持ち送りする横穴式石室はこの小地域にも多くあり、急激なものと、ゆるやかなものとがある。基本的に前者は玄室の壁が四周とも持ち送りを成し、天井石が1石のドーム状天井構造の石室である。後者は玄室の側壁の一部分が持ち送られ、天井石は2~3石以上の平面形の石室である。敷石についてはその多くが玄室内全面で、右側や左側の一部が敷かれているものは少ない。南部地域では敷石は基本的に、玄室の全面、玄室の右半分、玄室の右半分から奥壁にかけて逆L字状、両袖式の左右延長部分と分けられる⁽¹⁸⁾（図20）。それらのほかに北部地域では、玄室の左半分にのみ敷石を敷いているものもみられる。そして、小型石や河原石を敷くことが多く、床面を平らにし、湿気をはらうためではないかと考えられる。近江の湖西地域以外にある階段式石室は、この小地域にはほとんどみられずに数が少ない。

ここで詳しく石室の玄室の平面に注目してみる。湖西

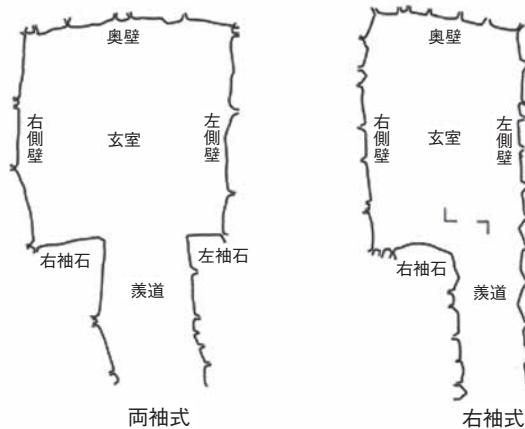


図19 横穴式石室の各名称

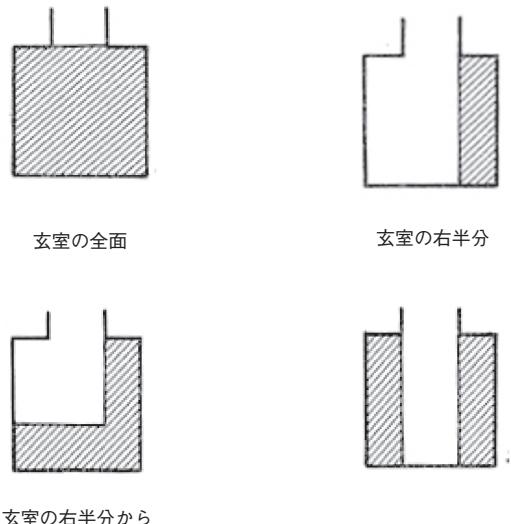


図20 主な敷石の特徴

地域全体の玄室規模分布（図22のa）をみると、玄室長幅比は（長／幅）2.00以下に集中しているが、2.00以上は畿内型石室と見なされるがそうであるものも多く分布している。また全体では、玄室の長さ2～4mと、幅1～3mにほとんどの石室が密集していることから、それほど大きい玄室を持たない石室が造られたことがわかる。I型の横長長方形の型式が幅広くみられ、玄室の形は定まっていなかったことがうかがえる。

南部地域は表1に示すものをみると、III型の縦長長方形（183基）が多いなかで、II型の正方形（25基）とI型の横長長方形（16基）もみられ、II型とI型は先ほども述べたように大津北郊（35基）に多く、本稿で示す範囲で志賀地域（6基）にも多少確認される。袖の形状は、両袖式（27.0%）と右片袖式（47.5%）が多く、無袖式（4.5%）や左片袖式（1.2%）は少ない。I型は両袖式（8基）と右片袖式（5基）と、両袖式の方が多くみられ、玄室の幅が極端に長い反面、長さが短くなるT字形の石室もある⁽¹⁹⁾。II型は両袖式が右片袖式より多く、III型は右片袖式が両袖式より少し多い石室形態を持ち、左片袖式や無袖式はIII型に少しみられる程度である。III型の縦長長方形は玄室の長さと幅の比が2：1となり、幅を長さで割った玄室長幅比が2.00以上である畿内型石室もみられる。しかし、この地域においてこの型式の横穴式石室は少ない。

ドーム状天井構造の玄室である石室は畿内型石室では存在しないが、平天井構造の玄室を持つほとんどの石室が畿内型石室と同様な形をしている。これらの古墳には須恵器の副葬が少ないとことや、確認調査されていないことが多いため建築時期の詳細を把握できない。しかし、

おおむね6世紀後半あたりにこの型式の横穴式石室が造られたのではないかと推測される⁽²⁰⁾。

この地域の玄室規模分布（図22のb）から、III型の縦長長方形では、玄室長幅比が2.00に満たない玄室が多く造られており、2.00以上の玄室は2.00以下の玄室より少ない。玄室の長さ2～4m、幅1～3mのものが集中することから、小規模の玄室を持つ石室が多く築造されていることがわかる。II型の正方形では、玄室の長さと幅がほとんど2～4mの間にあり、他の型式と比べて規模は変わらないことがわかる。I型の横長長方形では、玄室の幅が0.90に近いものが多いことから、極端に玄室が横長に造られるわけではない。II型やI型の玄室の長さが5mを超えるものはみられず、ほとんどが3～4mに集中する。

北部地域は横穴式石室の詳細を知ることができるものが少なく、表2で示したものは28基である。そのなかでその形態をみると、ほとんどがIII型の縦長長方形であり、24基とこの地域のなかで85.7%を占める。また、II型の正方形（1基）は少なく、I型の横長長方形は現在のところ確認されていない。玄室の形が縦長長方形のなかで、玄室長幅比が2.00以上である畿内型石室（70.8%）が多く出現する。玄室において側壁を持ち送る横穴式石室もあるが、奥壁側は持ち送っていないことが多く、天井石が2石以上用いる。ドーム状天井構造の石室と呼べるものはなく、玄室長幅比が2.00以上でないのもみられるが、横長長方形の形を呈するものはない。

こちらも横穴式石室の形が確認できた表1の北部地域で示す28基をみると、大部分が右片袖式（53.6%）と両袖式（32.1%）が占め、無袖式（3.6%）は少なく左片

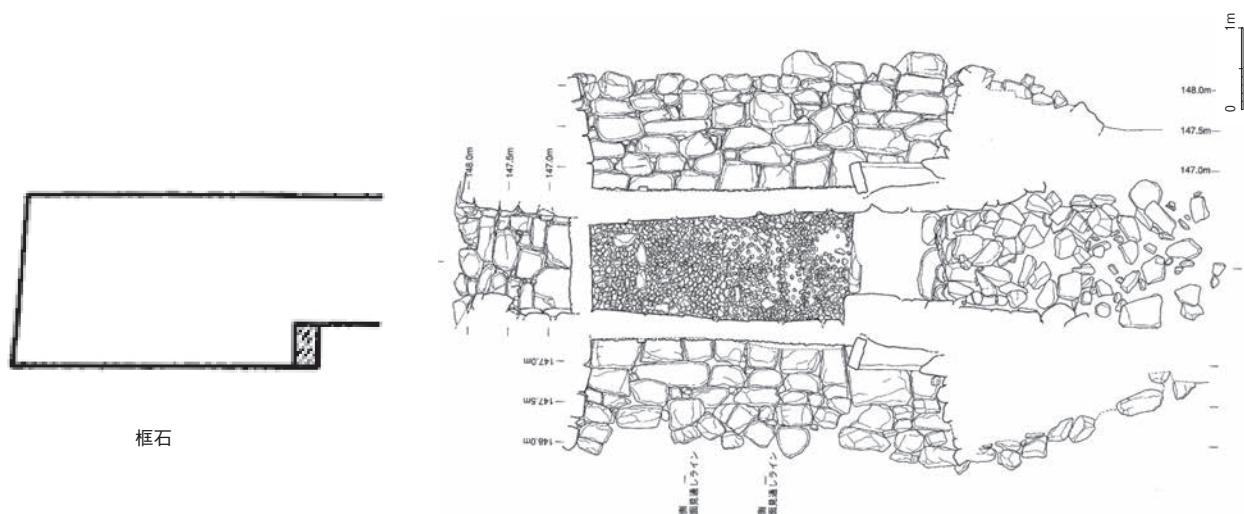


図21 北牧野2号墳の横穴式石室

表1-1 湖西地域の横穴式石室

・湖西南部地域（瀬田川から西の大津市）

	古墳	玄室 平面形	石室構造	玄室			羨道		玄室比	開口方向	築造時期	備考
				長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	長さ(m)	幅(m)				
1	国分大塚古墳後円部石室	III	両袖	4.40	2.10		2.20	1.50	2.10	南南東		持ち送り
2	国分大塚古墳前方部石室	III		2.90	1.40				2.07			
3	園山2号墳	III	両袖	3.33	2.12		3.33	1.39	1.57			
4	園山3号墳	III	両袖	3.03	2.42		2.42	1.36	1.25			敷石
5	園山4号墳		不明				2.73	1.33				
6	園山5号墳	III	右片袖	2.88	2.12		3.03	1.42	1.36			
7	福王子1号墳	III	右片袖	3.20	1.80	1.90	1.60	0.85	1.78	南南東	TK10?	玄室天井石2石
8	福王子2号墳	III	右片袖	3.00	2.50		3.70	1.00	1.20	南東	MT15	持ち送り・ドーム状
9	福王子6号墳	III	右片袖	3.40	2.50	2.60	3.00	1.10	1.36	南東	MT15	持ち送り・ドーム状 玄室天井石2石
10	福王子8号墳	II	両袖	2.90	2.50	2.40	3.60	1.10	1.16	南東	TK10?	持ち送り・ドーム状
11	福王子15号墳			2.60		2.00	4.20	1.30		ほぼ南南東		
12	福王子16号墳	III	右片袖	2.90	2.20	1.80	2.30	1.05	1.32	南南東	TK10～MT85	
13	福王子17号墳	III	右片袖	4.10	2.30		3.20	1.05	1.78			
14	福王子18号墳	III	右片袖	3.30	1.70		1.10	0.90	1.94			
15	福王子19号墳	III	右片袖	3.20	1.70		1.20	0.80	1.88			
16	太鼓塚1号墳	III	右片袖	2.20	1.80	1.60	2.50	1.10	1.22	南東	TK209	持ち送り・ドーム状
17	太鼓塚2号墳	III	右片袖	3.40	2.80	2.50	2.40	1.40	1.21	南南西	TK209	持ち送り・ドーム状 敷石(全面)
18	太鼓塚3号墳	III	右片袖	4.50	2.20	1.60	2.10	1.20	2.05	南南西	TK10	持ち送り・ドーム状
19	太鼓塚4号墳	III	右片袖	2.60	1.60	1.90	4.20	1.10	1.63	南	TK43～TK209	ドーム状
20	太鼓塚5号墳	III	両袖	4.50	3.10	2.20	4.40	1.30	1.45	南	TK10	持ち送り・ドーム状?
21	太鼓塚6号墳	II	両袖	2.50	2.20	2.10	4.40	1.00	1.14	南南東	TK209	持ち送り・ドーム状 敷石(全面)
22	太鼓塚7号墳	III	両袖	2.50	1.70	1.90	2.10	0.10	1.47	南南東	TK43	持ち送り・ドーム状 敷石(全面)
23	太鼓塚8号墳	III	右片袖	2.80	1.80	1.90	3.80	1.30	1.56	南南東	TK209	持ち送り・ドーム状
24	太鼓塚9号墳	I	両袖	3.20	4.20	3.00	7.00	1.40	0.76	南	TK43	敷石(全面)
25	太鼓塚10号墳		両袖				4.60	1.40		南	TK209	
26	太鼓塚11号墳	II	両袖	2.30	2.00	1.60	3.60	2.00	1.15	南	TK217?	敷石(右から0.8m)
27	太鼓塚12号墳	II	両袖	3.10	2.70	2.60	5.00	1.30	1.15	南	TK209～TK217	敷石(全面)
28	太鼓塚13号墳	III	右片袖	3.20	1.60	1.00	2.70	1.00	2.00	南		
29	太鼓塚15号墳	III	右片袖	3.50	2.20	1.40	3.50	1.30	1.59	南	TK209～TK217	敷石(全面)
30	太鼓塚16号墳	III	右片袖	3.00	2.20	1.10	3.40	1.20	1.36	南	TK209	敷石(右3/4)
31	太鼓塚17号墳	I	右片袖	3.10	4.20	3.00	7.00	1.30	0.74	南	TK217	敷石(全面)
32	太鼓塚18号墳	I	右片袖	3.10	4.20	3.00	7.00	1.30	0.74	南	TK217	敷石(右半分)
33	太鼓塚20号墳	III	右片袖	2.80	2.10	1.80	3.80	1.10	1.33	南	TK209～TK217	持ち送り
34	太鼓塚22号墳	III	右片袖	2.70	1.60	1.30	5.20	1.10	1.69	南	TK209～TK217	敷石(右3/4) 持ち送り
35	太鼓塚23号墳	III	右片袖	2.70	1.80	1.40	6.80	1.40	1.50	南	TK209～TK217	敷石(右) 持ち送り
36	太鼓塚24号墳	III	右片袖	3.60	2.80	2.00	5.40	1.30	1.29	南	TK43～TK209	敷石(全面?) 持ち送り
37	太鼓塚25号墳	III	両袖	2.40	1.40	1.40	3.40	1.10	1.71	南	TK217	敷石(右半分) 持ち送り
38	太鼓塚26号墳	II	両袖	2.90	2.85	1.90	2.00	1.20	1.02	南	TK43	敷石(全面)
39	太鼓塚27号墳	III	右片袖	3.15	2.15	1.30	2.20	1.10	1.47	南	TK10	
40	太鼓塚28号墳	III	両袖	2.50	1.85	1.40	5.00	1.10	1.35	南	TK209	敷石(右半分) 持ち送り
41	太鼓塚29号墳	III	右片袖	3.30	2.20	0.90	1.40	1.00	1.50	南	MT85～TK43	
42	太鼓塚30号墳	III	両袖	3.30	2.20	0.90	1.40	1.00	1.50	南	MT85	
43	太鼓塚32号墳	I	両袖	3.20	4.00	3.00	8.80	1.80	0.80	南	TK209	敷石(全面) 持ち送り
44	太鼓塚33号墳	III	右片袖	3.20	2.00	2.20	2.10	0.90	1.60	南	MT85	持ち送り
45	北山田1号墳	III	右片袖	3.60	2.40		5.00	1.20	1.50	南東		副室(奥行き0.6m、 長さ1.2m)

表1-2 湖西地域の横穴式石室

・湖西南部地域（瀬田川から西の大津市）

	古墳	玄室 平面形	石室構造	玄室			羨道		玄室比	開口方向	築造時期	備考	
				長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	長さ(m)	幅(m)					
46	百穴2号墳	III	両袖	2.40	2.00	1.70		1.00	1.20	南東		天井石1石	
47	百穴3号墳	III	両袖	2.50	2.00	2.60	1.55	0.88	1.25	南東		天井石1石・持ち送り	
48	百穴4号墳	III	両袖	3.00	2.50	2.60		0.90	1.20	南		持ち送り	
49	百穴6号墳	II	両袖	3.15	3.00	3.00	4.20	0.80	1.05	南南東		持ち送り	
50	百穴8号墳	II	両袖	2.50	2.60	2.30	1.80	0.90	0.96	南		持ち送り	
51	百穴9号墳	III	右片袖？	3.10	2.06	3.10			1.50	南南東		持ち送り	
52	百穴10号墳	III	右片袖	2.60	1.80		2.60	0.95	1.44	南南東			
53	百穴11号墳	III	両袖	2.40	2.00	1.70			1.20	南		天井石1石	
54	百穴12号墳	II	両袖	2.50	2.70	3.00	3.50	1.10	0.93	南		持ち送り	
55	百穴13号墳	III	両袖	3.50	2.60	2.00	4.10	1.10	1.35	南南東		持ち送り	
56	百穴14号墳	III	右片袖	2.70	2.20	0.75		0.94	1.23	南南東			
57	百穴21号墳	II	両袖	3.10	3.00	3.40		0.65	1.03	南南東			
58	百穴25号墳	II	右片袖	2.55	2.55	1.60	1.65	1.10	1.00	南南東		天井石2石	
59	百穴32号墳	III	右片袖	2.60	1.75	2.00	1.25	0.85	1.49	南南東		天井石2石・持ち送り	
60	百穴36号墳	III	右片袖	2.50	1.00	1.30	3.20		2.50	南南東			
61	百穴42A号墳	III	右片袖	2.70	1.60	2.50	2.60	0.95	1.69	南		天井石1石	
62	百穴42B号墳	III	右片袖	2.70	1.60	2.60	3.60	1.20	1.69	南		天井石1石	
63	百穴43A号墳	III	右片袖	2.10	1.55	1.15			1.35	南		天井石1石	
64	百穴43B号墳	III	右片袖	2.70	1.70	2.40	4.10	1.10	1.59	南		天井石1石	
65	百穴44号墳	III	右片袖？	3.30	2.00	1.70	4.00	1.65	1.65	南			
66	百穴61号墳	II	両袖	2.48	2.12	2.17	2.06		1.17	南南東		天井石1石	
67	熊ヶ谷1号墳（桐畑古墳）	III	両袖	5.00	3.10	4.00	6.00	1.40	1.61	南東		持ち送り・ドーム状敷石（全面）	
68	熊ヶ谷2号墳	III	両袖	3.10	1.95	3.40	4.10	1.20	1.59	南南東		持ち送り・ドーム状	
69	熊ヶ谷5号墳	III	右片袖	2.40	1.40	1.60	1.40	0.80	1.71	南南東		持ち送り・天井石3石	
70	熊ヶ谷7号墳	III	両袖	2.50	2.00	2.20	3.40		1.25	ほぼ南		持ち送り・ドーム状	
71	熊ヶ谷10号墳1号石室	III	両袖	2.40	1.90	2.40	2.30	0.80	1.26	ほぼ南		持ち送り・ドーム状	
72	熊ヶ谷10号墳2号石室	III	両袖	2.40	1.80	1.90	2.60	0.90	1.33	ほぼ南		持ち送り・ドーム状	
73	小山3号墳	III	右片袖	2.65	1.43	0.89	1.49	1.00	1.85	東南東		持ち送り	
74	小山4号墳	II	両袖	2.65	2.65	1.61	4.80	1.25	1.00	東南	MT85	持ち送り 敷石（全面）	
75	大通寺3号墳	I	両袖	4.10	5.10	2.20	3.20	1.25	0.80	ほぼ南		持ち送り	
76	大通寺5号墳	III	両袖	4.10	3.35	2.80		1.70	1.22	東南	MT15	敷石（全面）	
77	大通寺8号墳	III	右片袖	3.20	2.20	3.20		1.35	1.45	南			
78	大通寺9号墳	II	右片袖	3.50	3.00			1.20	1.17	南南東			
79	大通寺10号墳	III	右片袖	2.80	1.90			0.90	1.47	南			
80	大通寺12号墳	III	右片袖	3.60	1.90			1.10	1.89	南南東			
81	大通寺13号墳	III	右片袖	4.80	1.56			0.80	3.08	南南西			
82	大通寺14号墳	III	右片袖	3.00	1.40			0.80	2.14	南南東			
83	大通寺15号墳	III	右片袖	3.80	2.15			0.75	1.77	南南東			
84	大通寺16号墳	I	両袖	3.20	3.70			1.10	0.86	南		敷石	
85	大通寺17号墳	III	右片袖	3.60	2.60			1.00	1.38	南			
86	大通寺18号墳	I	両袖	2.85	3.20		4.40	1.30	0.89	南南東		敷石（全面） 排水施設	
87	大通寺20号墳	III	右片袖	2.20	1.30			1.00	1.69	南	TK10	敷石（全面）	
88	大通寺21号墳	II		1.60	1.60				1.00	南			
89	大通寺22号墳	III		3.00	1.10				2.73	南南西			
90	大通寺23号墳	III	無袖	2.35	0.90		無袖式のため、 玄室に値を統一			2.61	南南西		
91	大通寺24号墳	III	無袖	2.60	1.90					1.37	南		
92	大通寺25号墳	III	無袖	2.00	1.18					1.69	南南西		
93	大通寺26号墳	III	両袖	2.40	1.45				1.66	南南西			
94	大通寺27号墳	III	右片袖	3.10	2.30		1.75	0.70	1.35	南南東			
95	大通寺28号墳	III	無袖	1.60	0.80		無袖式のため、 玄室に値を統一			2.00	南南東	TK217	
96	大通寺29号墳	III		2.30	0.50					4.60	南南東		
97	大通寺30号墳	III	右片袖	2.30	1.60		1.40	1.10	1.44	南南東	TK43	敷石（全面）	
98	大通寺31号墳	III	無袖	3.00	0.90		無袖式のため、 玄室に値を統一			3.33	南南東	TK217	
99	大通寺32号墳	II	右片袖	2.00	1.70		1.80	1.00	1.18	南南東	TK217	敷石（全面？）	

表1-3 湖西地域の横穴式石室

・湖西南部地域（瀬田川から西の大津市）

	古墳	玄室 平面形	石室構造	玄室			羨道		玄室比	開口方向	築造時期	備考
				長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	長さ(m)	幅(m)				
100	大通寺33号墳	III	右片袖	2.60	1.90		1.50	1.00	1.37	南南東	TK43	敷石（全面）
101	大通寺34号墳	III	右片袖	2.20	1.60		1.50	0.90	1.38	南南東		敷石（全面）
102	大通寺35号墳	III	両袖	2.10	1.50		1.60	1.00	1.40	南南東	TK217	敷石（全面）
103	大通寺36号墳	I	両袖	3.10	3.80		2.70	1.30	0.82	南南東	TK10	敷石（全面）
104	大通寺37号墳	III	右片袖	3.80	2.30		0.70	1.00	1.65	南南東	TK10	
105	大通寺38号墳	III	右片袖	2.90	1.70		1.20	0.60	1.71	南南西	MT15	持ち送り・敷石(右)・石棺(左に作り付け)
106	大通寺39号墳	III	右片袖	3.10	2.10		1.60	1.00	1.48	南南東	TK10	
107	大通寺41号墳	III	右片袖	3.50	2.10		0.70	1.10	1.67	南南西	TK47	
108	大通寺42号墳	III	無袖	2.30	1.10		無袖式のため、 玄室に値を統一		2.09	南南東	TK10	
109	大通寺43号墳	III	右片袖	2.80	1.60		5.60	0.80	1.75	南南東		
110	大谷1号墳	III	右片袖	3.30	2.00	1.00	1.70	1.00	1.65	南西	TK10	
111	大谷2号墳	III	両袖	2.70	1.65	0.90	3.00	0.90	1.64	南南東	?	敷石（全面）
112	大谷3号墳	III	右片袖	3.20	2.00	1.20	1.70	1.00	1.60	南	TK47～MT15	
113	大谷4号墳	III	右片袖	3.30	2.10	0.90	2.30	1.00	1.57	南	TK47～MT15	
114	大谷5号墳		両袖									
115	大谷7号墳	III	右片袖	3.20	1.70	1.60		0.90	1.88	南東		
116	大谷8号墳	III	両袖	2.70	2.10	2.60	2.20	1.20	1.29			天井石1石
117	大谷18号墳	II	両袖	3.50	3.30	3.40	4.00	1.30	1.06	南東		天井石1石
118	大谷29号墳	II		3.30	3.10	3.10			1.06	南南西		
119	大谷30号墳	II		2.90	2.50				1.16	南		
120	大谷南1号墳	III	無袖	2.20	1.00		無袖式のため、 玄室に値を統一		2.20	南東		敷石
121	大谷南2号墳		不明		0.85							
122	大谷南4号墳	I	不明	3.45	4.20				0.82			
123	穴太飼込1号墳	III	右片袖	4.55	2.90			1.35	1.57		TK10	
124	穴太飼込2号墳	I	両袖	3.15	4.20			1.45	0.75		TK43	敷石（両側）
125	穴太飼込3号墳	III	右片袖	4.40	2.95			1.35	1.49		TK10～MT85	敷石（逆L字状）
126	穴太飼込4号墳	III	右片袖	2.65	1.65			1.00	1.61		MT85～TK43	敷石（全面）
127	穴太飼込5号墳	III	右片袖？	3.55	1.80				1.97		TK10～MT85	
128	穴太飼込6号墳	III	右片袖	3.15	1.95			1.00	1.62			
129	穴太飼込7号墳		右片袖？	2.80								
130	穴太飼込8号墳	III	両袖	3.00	2.25			1.05	1.33			
131	穴太飼込9号墳		右片袖	3.80							TK43	
132	穴太飼込10号墳	III	右片袖	2.60	1.45			1.00	1.79		TK209	
133	穴太飼込11号墳	III	右片袖	3.40	2.80				1.21		MT85	
134	穴太飼込12号墳	II	両袖	2.70	2.35			1.20	1.15		TK209	敷石（前面）
135	穴太飼込13号墳		両袖		2.00					南東	TK209	
136	穴太飼込14号墳	III		2.05	1.65				1.24	南南東？		
137	穴太飼込15号墳	III	右片袖	3.62	2.04		2.18	0.90	1.77	南南東	TK10	
138	穴太飼込16号墳	I		1.30	1.81				0.72	南南西	TK47	敷石（右半分）
139	穴太飼込17号墳	III	右片袖	4.40	2.90		3.75	1.40	1.52	南南東	MT85～TK43	敷石（全面）
140	穴太飼込18号墳											
141	穴太飼込19号墳					1.20				ほぼ南	TK209	敷石（全面）
142	穴太飼込20号墳	III	右片袖	3.20	2.05				1.56	南		
143	穴太飼込21号墳	III	右片袖	2.95	1.90			1.20	1.55	ほぼ南	TK209	
144	穴太飼込22号墳				1.00					南東		
145	穴太野添1号墳	III	右片袖	1.90	1.10	0.50		0.55	1.73	南南東	TK217?	敷石（全面？）
146	穴太野添2号墳1号石室	III	右片袖	1.60	0.90			0.65	1.78	南	TK217?	
147	穴太野添2号墳2号石室	III	右片袖	2.10	1.20	0.40			1.75	南	TK217	敷石（全面）
148	穴太野添3号墳	III		1.10	0.65				1.69	南	TK217	
149	穴太野添6号墳	III	無袖	3.23	0.83	1.00	無袖式のため、 玄室に値を統一		3.89	南	TK10?	敷石
150	穴太野添7号墳	III	無袖	4.50	0.90	0.90			5.00	南南西	MT15～ TK10?	敷石
151	穴太野添20号墳		右片袖									
152	穴太野添40号墳	III	左片袖	2.60	1.00	1.20	2.00	0.90	2.60	南東		持ち送り

表1-4 湖西地域の横穴式石室

・湖西南部地域（瀬田川から西の大津市）

	古墳	玄室 平面形	石室構造	玄室			羨道		玄室比	開口方向	築造時期	備考
				長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	長さ(m)	幅(m)				
153	穴太野添56号墳	III	両袖	3.60	2.10	2.45		0.80	1.71			
154	穴太野添78号墳	III	右片袖	2.50	1.90	2.15			1.32	南西		持ち送り
155	穴太野添80号墳	III		2.30	0.80	0.55			2.88	南		持ち送り
156	穴太野添93号墳	III	右片袖	2.80	1.35	2.00	4.20	1.00	2.07	南		天井石1石
157	穴太野添96号墳	II	右片袖	1.20	1.13	0.86			1.06	南東		
158	穴太野添121号墳	III	右片袖	2.65	1.70	1.16		0.90	1.56			
159	穴太野添148号墳	III	右片袖	1.90	1.10				1.73	南南東		
160	穴太野添149号墳1号石室	III	右片袖	1.60	0.90				1.78	南		
161	穴太野添149号墳2号石室	III	右片袖	2.10	1.70			0.70	1.24	南		
162	穴太野添151号墳	III	無袖	3.23	0.83		無袖式のため、 玄室に値を統一		3.89	南		敷石（全面）
163	穴太野添152号墳	III	無袖	4.50	0.90	0.90			5.00	南南西		敷石（全面）
164	矢倉（塚穴）1号墳	II	両袖	3.30	2.80	3.30	3.50	1.20	1.18	南	MT85～TK43	
165	裳立山2号墳	III	右片袖	2.50	1.55	1.26	0.45		1.61	南南東		
166	裳立山21号墳	III	右片袖	2.30	1.20			0.85	1.92	南東		
167	裳立山24号墳	III	右片袖	2.30	1.10		0.80	0.80	2.09	南東		
168	裳立山33号墳	I	両袖	1.10	2.03	1.82	2.80	1.30	0.54	南南東		
169	裳立山東1号墳	III	両袖	3.10	2.30	3.00	3.00	1.15	1.35			持ち送り・天井石1石
170	眞葛原古墳	III	右片袖	3.04	2.10	1.90	4.12	1.30	1.45	東南		
171	日吉2号墳	III	右片袖	2.90	2.20	3.00	2.30	1.05	1.32			持ち送り
172	日吉5号墳		右片袖				3.80	1.20		南東		
173	日吉6号墳	II	右片袖	2.30	2.20	2.60	1.30		1.05			
174	日吉12号墳	III	右片袖	2.40	1.70	1.00	3.50		1.41			
175	日吉15号墳	III	右片袖	2.80	1.60	1.30			1.75	南		
176	日吉16号墳	III	両袖	3.00	2.30	2.20	2.40	0.90	1.30			持ち送り
177	日吉36号墳						2.60	1.70		南		
178	日吉55号墳	III	両袖	2.80	1.65	1.65	0.55	0.40	1.70	南南東		持ち送り・天井石2石
179	嶽古墳	II	両袖	3.15	3.15		4.85	1.09	1.00		TK10～MT85	排水施設
180	春日山A-1号墳	III	両袖	2.00	1.20	0.90			1.67			天井石2石
181	春日山A-3号墳	III	両袖	2.90	1.60	1.50		1.00	1.81	南		天井石1石
182	春日山A-5号墳	II		1.50	1.38	2.30			1.09	南		やや持ち送り
183	春日山A-6号墳				1.30	1.60				南		持ち送り
184	春日山A-7号墳	III	右片袖？	2.37	1.20	1.00			1.98	南		
185	春日山A-11号墳	III		2.40	1.20			1.20	2.00	南		
186	春日山A-13号墳	III	右片袖	3.70	1.70	1.85	2.50	0.80	2.18	南		
187	春日山A-14号墳	III	右片袖	3.50	1.95	2.60	3.20	0.90	1.79	南		天井石2石
188	春日山A-15号墳	III	右片袖	3.60	2.00	2.70	2.90	1.00	1.80	南		
189	春日山A-28号墳	III		3.00	1.00	1.10			3.00	南		
190	春日山A-29号墳	III	右片袖	3.70	1.85	2.30	2.40	1.10	2.00	南		
191	春日山A-30号墳	III		3.00	0.80	0.77			3.75	南		天井石2石残存
192	春日山A-31号墳	III	右片袖	2.80	1.40	0.77		2.00	2.00	南		
193	春日山A-33号墳	III		2.00	1.10	0.95			1.82			
194	春日山A-34号墳	III		2.50	1.00	1.20		1.00	2.50	南南東		
195	春日山B-1号墳	III	右片袖	3.85	1.90	2.35	2.60	1.30	2.03	南		天井石3石
196	春日山B-5号墳	III	右片袖	3.15	1.50	2.15	1.80	1.10	2.10			天井石3石
197	春日山B-7号墳	III	右片袖	3.40	1.45	2.20	1.00	1.05	2.34			天井石3石
198	春日山B-8号墳	III	両袖	2.66	1.70	2.05	1.90	1.05	1.56			天井石2石
199	春日山B-11号墳	III		4.00	2.20	1.35			1.82	西南		
200	春日山B-18号墳	III	両袖	4.00	1.50	3.10	0.92	1.05	2.67			天井石3石
201	春日山B-19号墳	III	右片袖	3.93	1.93	2.28	1.68		2.04			天井石3石
202	春日山B-21号墳	III		4.15	1.90	2.85	2.20	1.10	2.18			天井石2石
203	春日山B-25号墳	III	右片袖	3.45	1.70	1.00			2.03	東		
204	春日山B-42号墳	III	右片袖	3.55	2.30	3.00		1.00	1.54			天井石3石
205	春日山B-43号墳	III	両袖	2.70	1.90	2.00			1.42	南		天井石3石
206	春日山B-47号墳	II	右片袖	1.50	1.50	1.00	1.20	1.00	1.00			天井石2石
207	春日山C-2号墳	III	右片袖	3.50	1.60	2.50	1.25	0.90	2.19	南西		
208	春日山C-8号墳	I	右片袖	1.50	2.35	1.30	0.95	1.60	0.64	東		

表1-5 湖西地域の横穴式石室

・湖西南部地域（瀬田川から西の大津市）

	古墳	玄室 平面形	石室構造	玄室			羨道		玄室比	開口方向	築造時期	備考
				長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	長さ(m)	幅(m)				
209	春日山C-9号墳	III		2.20	0.90	0.85			2.44			
210	春日山C-14号墳	III	右片袖	3.10	1.70	2.00	1.00	1.00	1.82	東		天井石3石
211	春日山C-23号墳	I	右片袖	1.20	1.40	3.00	0.90	1.60	0.86			
212	春日山C-27号墳	III	右片袖	3.80	1.80	2.70	1.60	0.90	2.11	南東		
213	春日山C-28号墳	I	右片袖	1.20	2.00	2.00			0.60	南		
214	春日山C-35号墳	III	右片袖	2.50	1.40	1.10	1.00	0.80	1.79	東南		
215	春日山D-2号墳	III	右片袖	3.35	1.30	1.15		0.85	2.58			天井石4石
216	春日山D-3号墳	III		4.50	1.60	2.15			2.81			
217	春日山D-4号墳	I	T字形	1.71	5.20	1.54	1.00	8.50	0.33			持ち送り・天井石5石
218	春日山D-13号墳	III	右片袖	2.30	1.32	0.61	1.60	1.00	1.74			持ち送り
219	春日山D-28号墳	III	右片袖	3.45	1.29	1.62	0.80	0.38	2.67			天井石3石
220	春日山D-31号墳	III	両袖	3.90	1.40		4.00	1.00	2.79			
221	春日山D-32号墳	III		5.12	2.30	2.00	1.88	1.90	2.23			
222	春日山D-33号墳	III	右片袖	5.12	2.30	2.00	1.88	1.90	2.23			
223	春日山G-5号墳	III	右片袖	3.40	2.00		6.00	0.85	1.70	南	TK10～MT85	
224	曼陀羅山11号墳	III	両袖	3.90	1.90	2.40	5.10	1.15	2.05	南南東		天井石2石
225	曼陀羅山24号墳	III		4.45	2.20	2.46	4.30	1.00	2.02	南		天井石3石
226	曼陀羅山54号墳	III	左片袖	4.40	2.00	2.00	2.40	0.90	2.20	西		持ち送り 天井石3石
227	曼陀羅山83号墳	III		3.20	1.75	2.10			1.83	南南東		天井石2石
228	曼陀羅山88号墳	III		4.00	2.10	1.60			1.90	南		天井石2石
229	唐臼山古墳									南		全長約5m・ 加工された平石
230	ヨウ1号墳	III	両袖	3.90	1.95	2.15	3.95	0.97	2.00	南南東		天井石3石
231	石釜2号墳	III		4.40	2.00	2.20			2.20	ほぼ南東		持ち送り
232	石神1号墳	III	右片袖	2.70	1.50	1.02	1.80	1.00	1.80	南南東	TK209	
233	石神3号墳	III	両袖	4.62	2.57	2.95	1.30	1.57	1.80	南南東		ドーム状
234	石神4号墳	III	両袖	3.90	2.66	3.27	1.96	1.25	1.47	南東		持ち送り ドーム状
235	南船路3号墳	III	両袖	3.30	1.50	1.00	0.90	1.00	2.20	南		
236	北小松A-1号墳	III	左片袖	4.10	1.92	1.76	0.84	0.95	2.14	ほぼ西南西		持ち送り
237	北小松A-4号墳	III	不明	2.60	2.13	1.70			1.22	ほぼ西南西		持ち送り
238	北小松B-1号墳	III	両袖	3.44	1.79	1.84			1.92	ほぼ南南西		持ち送り
239	北小松B-2号墳				1.00	1.20				南南西		
240	北小松B-3号墳				0.80	1.00						
241	北小松B-4号墳		不明		1.40					南南西		
242	北小松B-5号墳	III	不明	4.74	1.50	1.22			3.16	ほぼ南南西		持ち送り
243	北小松B-6号墳						2.18	0.72		ほぼ南南西		
244	北小松北古墳	III		3.25	1.48	0.91			2.20	ほぼ北西		

袖式はない。前章で述べたもの以外で特異な階段式石室の北牧野2号墳においては、「玄室床面が羨道床面よりも一段低くなっている場合に、その段をなす部分に横長に置かれた石」の框石と呼ばれるものを2石分立てる⁽²¹⁾（図21）。

この地域の玄室規模分布（図22のc）から、Ⅲ型の縦長方形では、畿内型石室である玄室長幅比が2.00以上のものが多くみられ、それに近いものもある。玄室の長さが2～5mであり、幅は3m以下と玄室長幅比2.00になり得るものが多いことがわかる。そのほかに玄室の長さが9mのものもあるが、石室の状況があまり把握でき

ないため、玄室と羨道の区別がつかないが、もう少し短くなると考えられる。Ⅱ型は1基だけあるが、玄室長幅比1.00の比率線上に乗る。これは、正確な正方形の玄室を志向したと考えられる。

2) 石積みについて

次に横穴式石室の石材をみると、主に花崗岩の山石でその他に川などに分布する河原石なども使用する。大型石のものから小型石のものがあり、組み合わせ方をかえて構成される。基本的にこの小地域の石室は1～1.5mの大型石を使用する。横穴式石室墳の周辺に分布する石

表2 湖西地域の横穴式石室

・湖西北部地域（高島市）

	古墳	玄室 平面形	石室構造	玄室			羨道		玄室比	開口方向	築造時期	備考
				長さ(m)	幅(m)	高さ(m)	長さ(m)	幅(m)				
1	下井1号墳	III	両袖	2.70	1.35		3.00	0.75	2.00	南		
2	下井2号墳	III	両袖	2.10	0.95		1.60	0.80	2.21	南		
3	下井3号墳	III	両袖	2.93	0.82		1.10	0.75	3.57	南		
4	下井5号墳	III	両袖	2.20	0.90			0.50	2.44	南東		
5	白髭神社1号墳	III	両袖	2.51	1.95	1.07	3.64	1.13	1.29	ほぼ南		持ち送り
6	拝戸古墳群第2支群1号墳	III	右片袖	4.50	2.70	1.40	0.75	0.85	1.67			
7	拝戸古墳群第2支群6号墳	III	右片袖	2.60	1.35				1.93	南東		
8	拝戸古墳群第2支群7号墳		右片袖	2.10			2.40	0.85		ほぼ南東		
9	拝戸古墳群第3支群1号墳	III	右片袖	3.80	1.40				2.71	南東		
10	拝戸古墳群第3支群5号墳	III		2.72	1.68	2.00			1.62	東		
11	音羽古墳群石穴支群8号墳	III	両袖	3.05	1.65	2.00	3.50	1.30	1.85	南東		
12	音羽古墳群石穴支群9号墳	III	右片袖	3.00	1.90		4.00	1.40	1.58	東南東		敷石（全面）
13	音羽古墳群石穴支群10号墳	III	右片袖	4.10	2.00	1.80	4.10	1.50	2.05	東南東		敷石 玄室奥に平らな巨石
14	音羽古墳群石穴支群13号墳	III	右片袖	3.30	1.60		1.40	1.00	2.06	東南東		敷石（左半分）
15	音羽古墳群石穴支群14号墳	III	右片袖	4.15	2.00		2.60	1.20	2.08	東		敷石（ほぼ全面）
16	音羽古墳群石穴支群15号墳	III	両袖	2.50	1.60		3.00	1.00	1.56	南南東		
17	音羽古墳群石穴支群16号墳		右片袖									
18	音羽古墳群大炊神社裏山古墳		両袖									
19	鴨稻荷山古墳	III	右片袖？	9.00	1.90		玄室に値を統一		4.74	南東	TK10	
20	田中36号墳	III	右片袖	4.50	2.00		3.40	1.10	2.25	南西		遺骸安置空間 持ち送り、敷石（全面）
21	建速羽神社古墳	II	両袖	2.70	2.70	1.70	5.50	1.50	1.00	南南東		
22	酒波東1号墳	III		5.00	1.50		3.50	1.45	3.33	ほぼ南東		
23	酒波東2号墳	III		2.60	1.20		4.40	1.05	2.17	南		
24	酒波東3号墳	III	無袖？	4.20	1.50		5.00	1.10	2.80	南東	TK217	
25	妙見山F-1号墳	III	右片袖	2.30	1.10		2.30		2.09	南	TK217	
26	西牧野41号墳	III	右片袖	4.55	1.90		1.83	1.00	2.39	南東	TK10	石棚（幅2.00m、 長さ1.60m）
27	北牧野2号墳	III	右片袖	3.20	1.20		3.00		2.67	南	TK43	階段式石室 敷石（ほぼ全面）
28	北牧野3号墳	III	右片袖	3.80	1.75	2.10		1.30	2.17	南	TK43～TK209	

材を選ぶため、比較的大きいものが選ばれたと考えられる。石材の置き方をみていく際に、玄室内に向けられた面の石の縦軸と横軸の長さが、床面から天井に向かって縦軸が横軸より長いものと、横軸が縦軸よりも長いものがあり、前者を縦向き、後者を横向きとする。基本的に下段から1段目は腰石の列や高さを保ちながら安定を図るために、縦向きに置く場合には大型の石材を、横向きの場合には比較的横長ものを使用する。1段目は、石室内に使われている石材として大きめの石を置き、2段目からは少し小さめの石を並べていることが多い。

石材においても、方形のものと丸いものがある。丸い自然石を使う場合には石と石のあいだの隙間を埋めるために、小型石をはめる。袖石に使用する石材の1段目は主に大きいものを用い、1石だけを縦向きにして置くが、袖部の幅が広いときは大型石と小型石を組み合わせることもある。持ち送りをしている横穴式石室をみると、側

壁は、下段は縦向きのものや横向きのものとランダムに積み上げるものがあるが、上の段にいくほど石材は横向きのものを横に積んで内側に徐々にずらしながら重ね合わせて持ち送るものが多い。

4. 時期ごとの特徴

横穴式石室に副葬されている須恵器について、田辺昭三須恵器編年を使用し⁽²²⁾、築造時期を示すことができたものだけをみて、特徴を述べていく。

TK47型式の時期の石室は、右片袖式で縦長長方形や横長長方形がみられる。羨道の開口方向は南や南南西と南寄りが多い。玄室の基底石は横向きに石材が置かれ、2段目からも横向きに据えられる。袖石は複数の大型石に近い中型の石材を使用し、横向きに並べられる。これらの石材は整っていることや列をなすことから、比較的に形の整った石を採取したと考えられる。奥壁と側壁は、

4～5段目から持ち送られる。縦長長方形であるが、玄室長幅比が2.00には満たない。玄室の長さが4m、幅が2m前後となっているものが集中する（図23のa）。

MT15～TK10型式の時期の石室は、右片袖式や両袖式、無袖式とみられるが、両袖式より右片袖式が多い。縦長長方形・正方形・横長長方形と様々な形がみられ、開口方向も南東～南南西と幅広い。玄室の基底石は中～小型石を横向きや縦向きに置かれ、2段目からは横向きに石材を据える。袖石は、大型石を下段から1段目に置き、その上に中型石を横向きにしている。整えて並べるものや乱雑なものをみると、方形のほかに自然石の大きな石を使用していることがわかる。3段目から急激か、ゆるやかに持ち送りをし、MT15型式の石室はドーム状天井構造をしているものもある。玄室長幅比が2.00以上のものもみられ、畿内型石室が造られはじめる時期でもある。また、玄室の長さが3m以上、幅が2m前後のものが集中する（図23のa）。

MT85～TK43型式の時期の石室は、右片袖式と両袖式であり、縦長長方形・正方形・横長長方形がみられる。開口方向は、南から東のあいだである。玄室の基底石はほとんどが大型石や中型石を用いて、横向きに据えるものが多い。床面より埋める石材は、ほとんどが縦向きに据えられる。2段目は横向きに石材を並べているが、基本的に段をそろえて積む。袖石は、下段に大型石を用い、その上に中型石などを複数置いている。加工石より自然石を用いている石室が多く、自然石を使って隙間ができるところに小型石を埋めている。玄室の長さと幅がそれぞれ2.00m以上4.5m以下と、小さすぎず大きすぎない玄室の形をしていることがわかる（図23のb）。

TK209～TK217型式の時期の石室は、右片袖式と両袖式があり、縦長長方形と正方形で、横長長方形はTK217型式に多い。開口方向は南寄りとなっている。玄室の基底石は中型石に近い大型石を用い、基本的にTK209型式では横向き、TK217型式では縦向きに置かれている。玄室から羨道に向かって、石材が小さくなっていく。2段目からはほとんどが横向きに置かれており、段を揃えるように並べられ、2～3段目から持ち送りしている。そして、自然石を用いられているものが多く、高さを揃えるために様々な形のものを使用している。玄室も長さ4m以下、幅3m以下に多くあるが、全体的にみると大小様々な形をなす（図23のc）。

横穴式石室の形態で右片袖式や両袖式は、時期を通してみられる。無袖式がMT15～TK10型式の短期間である。

玄室の形では正方形が、MT15～TK10型式から出現し、その後もみられる。横長長方形は、どの時期を通しても少なからず造られる。玄室の基底石に使われる石材は中型石や小型石であったものに、大型石も使用されていく。2段目になると持ち送る場合が多くなるため、横向きに据えられていることが多い。袖石は1段目に使用している袖石の石材は中型石から大型石へと変化していく。そして、TK209～TK217型式では柱状の石材を縦向きに据えて使う。2段目から複数の石材が積み上げられるのは、基盤をしっかりとさせるためだろう。

石室構築に使われる石材は、手ごろで整った石を選んで積み上げていたものが、時期が新しくなるにつれて形が不揃いな自然石へと変わっていく。調整用の石と不整形の自然石を組み合わせ、高さを揃えていったと考えられる。また、石室が造られる量が増えることで整った石だけでなく、自然石を使うことで石室を完成させていたとすることができる。

石室の玄室規模分布をみると、どの時期もほとんど同じ位置に分布していることから、玄室はほとんどが似たような規模で造られていたことがわかる（図23のd）。玄室長幅比が1.00～2.00のあいだに集中していることから、正方形に近いものから、畿内型の細長い石室に近いもの多くが築造されていった。

5. 立地条件と横穴式石室の関係

ここでは、横穴式石室墳がどういった立地に配置されているのかを、古墳の分布から見ていくことでその横穴式石室形状とどのような関係にあるのかを見る（図16）。そのなかでどの場所に古墳が立地しているのかをみると、山麓・山腹・丘陵・平地・山頂がある。これは、『滋賀県遺跡地図 平成22年度』を参考にしている⁽²³⁾。

南部地域は、大津北郊を中心として横穴式石室が狭い範囲に集中して分布しているが、その西側には山々が連なり比叡山系となっているために閉鎖的な地形となっている。この地域に多い構造であるドーム状天井構造の横穴式石室は九州や朝鮮半島にもみられることから、その関係も考えられる。

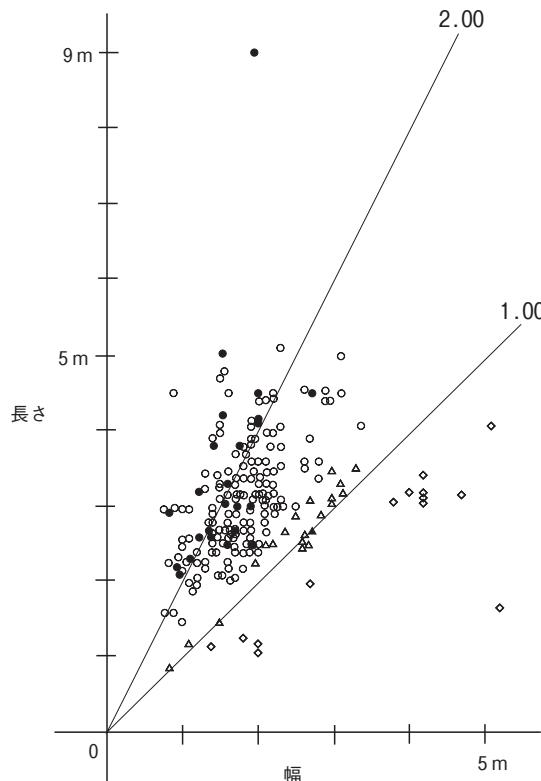
石室に使う石材はおそらく各地方の分布状況によって、その土地に見合った横穴式石室を造ることができ、分布が少ない土地では石室が小さくなる。この地域は独自な横穴式石室を造ることをしていたと考えられる。

次に横穴式石室の立地をみると、山麓に多く築造され、狭い平地の場合にはほとんど造られていない。山麓に横

穴式石室墳が多い区域は大津北郊であり、志賀地域においてはゆるやかで低い丘陵に基本的には造られる。その地域では丘陵が広い範囲に渡ってみられ、丘陵の上の方では琵琶湖を眺めることができるため、それらを考えた

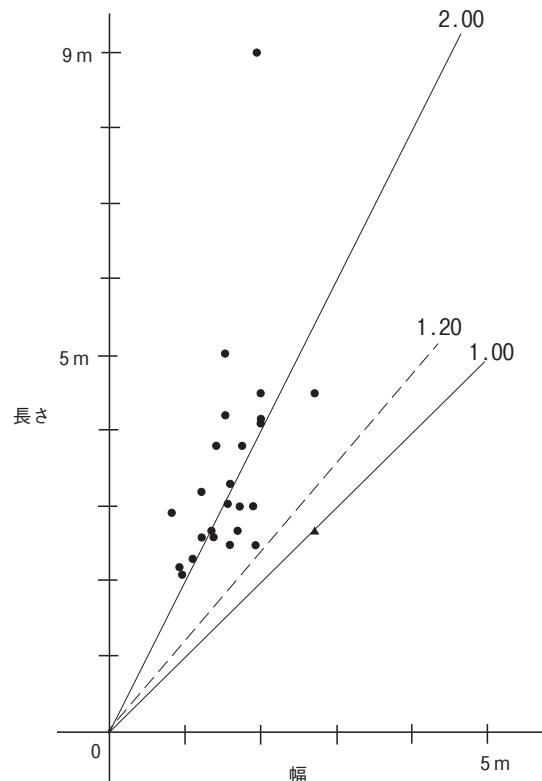
上で古墳が造られていたと考えられる。

これらの地域では多くの築造数を成すため、山腹や平地ではそれらが造ることのできない地形となっている。山麓であれば、丘陵地形として広範囲に古墳を築造でき



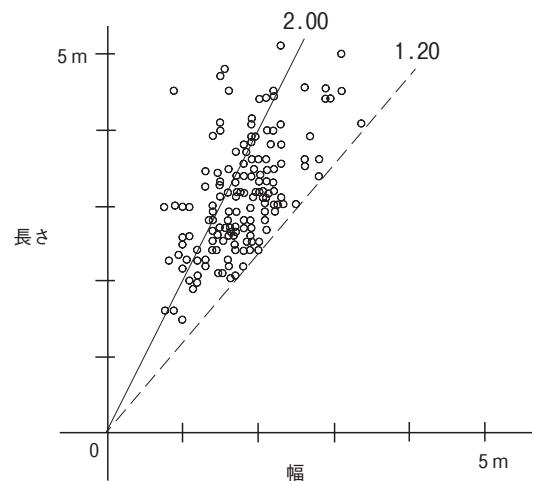
a、全体

- =南部地域の縦長長方形、△=南部地域の正方形、
- ◇=南部地域の横長長方形、●=北部地域の縦長長方形、
- ▲=北部地域の正方形

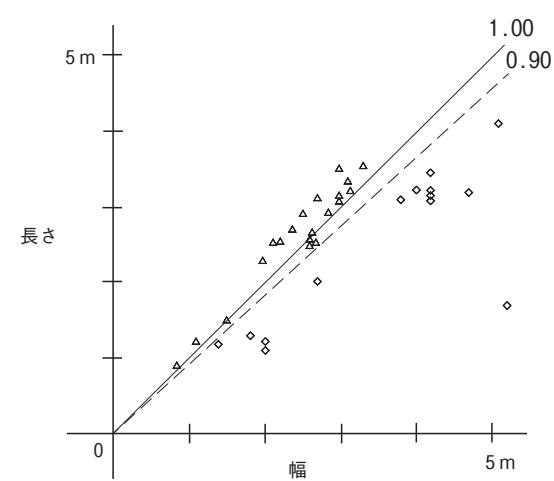


c、北部地域

	平均（全体）	平均（無袖式を除く）	平均（鶴稲荷山古墳を除く）
玄室の長さ	3.47	3.44	3.24
玄室の幅	1.62	1.63	1.61
玄室比	2.13	2.11	2.01



b、南部地域（左：縦長長方形、右：正方形と横長長方形）



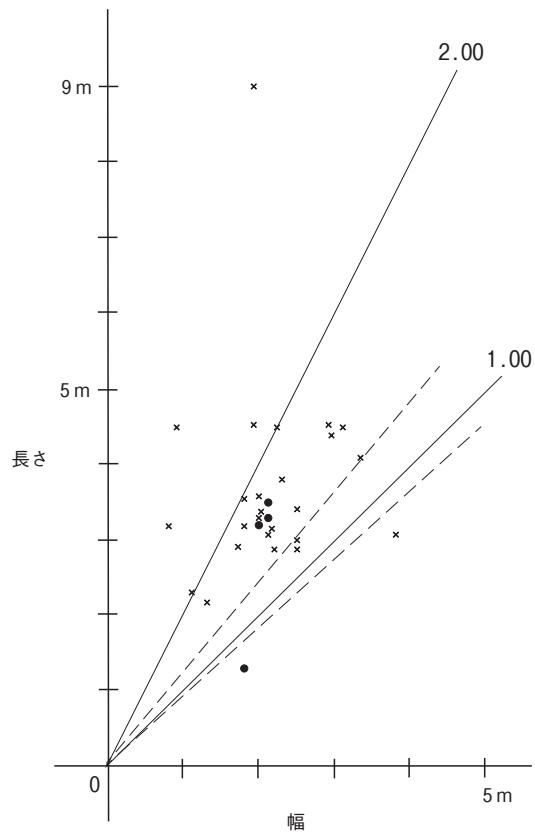
	平均（全体）	平均（無袖式を除く）
玄室の長さ	3.00	3.01
玄室の幅	1.95	1.99
玄室比	1.54	1.51

図22 湖西地域の横穴式石室玄室平面規模分布図

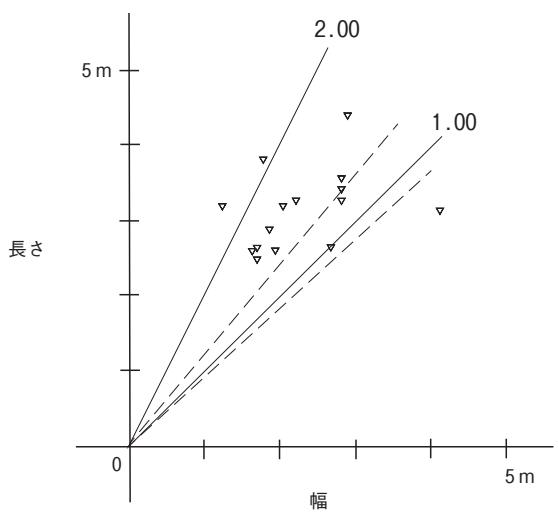
る状況であったと考えられる。瀬田川西岸周辺の古墳群は総数がそれ程少ないとや単独墳がみられるため、平地や山麓など地形のいたるところを利用している。

一方で、北部地域では横穴式石室墳が広い範囲に点々

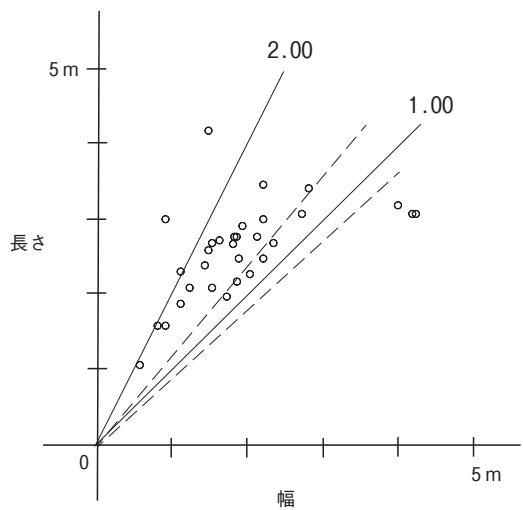
としている。西側には比良山地があり、それがこの地域すべてを囲っているわけではないため、日本海側からの石室の築造方法の流入が活発だったのではないだろうか。西牧野41号墳の石棚は北九州などの瀬戸内海を中心とし



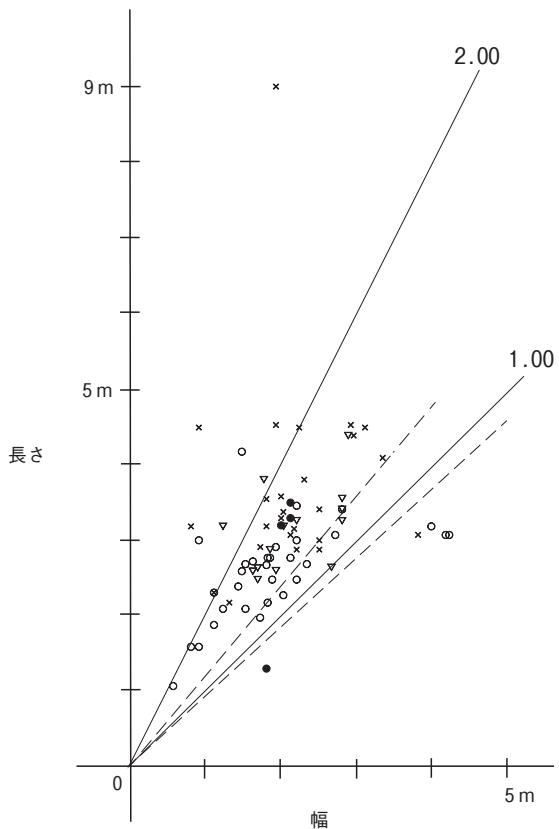
a、TK47、MT15～TK10
 TK47=●、MT15～TK10=x、
 MT85～TK43=▽、TK209～TK217=○
 ※破線は、上から 1.20、0.90 である。



b、MT85～TK43



c、TK209～TK217



d、全体

図23 湖西地域の時期別横穴式石室玄室規模分布図

た地域に分布する横穴式石室に多くみられ、石棚の下に遺体を安置する空間を造っている⁽²⁴⁾。斉頼塚古墳とも呼ばれ、古墳群のなかでこれだけが特異な横穴式石室であることから、盟主墳とされる。田中36号墳において、玄室と遺骸安置空間のあいだが障壁石で区切られるものは⁽²⁵⁾、九州地方の石室の要素が加わるとされる。これらの古墳は、「奥壁に沿った狭い空間に特別な意識を抱き、その部分のみ区別しているのは北部九州や中九州に類例が認められる「石屋形」と呼ばれる施設との関連が考えられる」としている⁽²⁶⁾。このことから、九州などから構築方法が入り、玄室のなかに遺体を安置する前に横穴式石室を造っていくと同時に、埋葬空間を造っていたことがわかる。横穴式石室墳が築造された立地は、山麓にはほとんど造られず、山腹に多い。加えて、平地にも造られているものは、平地の部分が広く、古墳を造る場所に最適であったと考えられる。

なぜ湖西地域において、山頂に横穴式石室を内部主体とする古墳がほとんど造られなかったのかは明確ではない。おそらく首長系の古墳だけを築造しているのではなく、多くの古墳を同じ空間に造ることに重点が置かれたのであろう。

石材として主に使われている花崗岩は湖西地域に分布しているため、基本的には古墳が立地する周辺の石を使っている(図16)。南部地域の横穴式石室を内部主体とする古墳は、花崗岩が分布する周辺に多く築造される。北部地域においては、花崗岩が分布しているところから少し離れた位置にみられる。横穴式石室に花崗岩を不整形な自然石のまま使用した場合には、小型石を石と石のあいだにできた隙間に埋めているが、それらは古墳の近くにある川などの石を使用していると考えられる。

花崗岩以外の石材を使っているものについては、南部地域の北側に位置する北小松古墳群で、花崗岩を使いつつ古墳の周辺に分布するチャートを使う⁽²⁷⁾。春日山古墳群で首長系である古墳の周辺は、湖東流紋岩と呼ばれる琵琶湖の東側に分布する流紋岩・花崗斑岩や、東海地方に分布する石英閃緑岩などを使用している⁽²⁸⁾。春日山古墳群が位置する場所は琵琶湖の東側の陸との距離が近いため、西側と東側で船での行き来がしやすく、流紋岩などが運べたのであろう。また、この古墳群がある近くに、船津が機能していたことが要因であるとしている⁽²⁹⁾。このように、花崗岩だけを横穴式石室に使用しているわけではなく、ほかの地域から運んできた石材などの種類が違う石材を使用している。

6. 南部と北部の特質

湖西地域は、九州・畿内などからドーム状天井構造や玄室がほぼ2:1の比率をもつ横穴式石室の特徴的な構造が入ってきた地域の1つである。この小地域だけでも様々な特徴を持つものが多く、一般的にはみられない構造になっているものや、ほかの地域にもほとんどみられないものを玄室内に造っているものがある。九州・畿内それぞれがもつ特徴的な部分を受け入れる地域に見合った形で石室を取り入れている。しかし、それらは南部地域にあっても北部地域には欠落するものがある。そのため、ここでは、これまで述べてきたものを参考にし、南部地域と北部地域の横穴式石室にはそれぞれどのような受け入れ方があるのか、その違いを見ていくことにする。

南部地域は、横穴式石室墳が密集して築かれ、100基以上の古墳を持つ古墳群がある。古墳の数が少ない古墳群も多くあり、古墳群によって差が大きいことがわかる。地形は当時とは多少異なっている部分もあるが、いずれにせよ平地が狭いなかでも横穴式石室を内部主体とする古墳が多く築造されているという点では、ある意味特徴的である。山麓や山腹に古墳を築造しているものがほとんどで、平地に古墳が造られているのは、古墳群が多いこの地域で前方後円墳である国分大塚古墳1ヶ所だけである⁽³⁰⁾。墳丘形態が他と違うことや、平地に限界があり、大きな古墳群を造ることができなかつたのかもしれない。そして、山麓や山腹に古墳があるものはほとんどが大津北郊で、志賀地域では丘陵に古墳を造っているため、地理的な景観によって古墳の存在のあり方が異なっていたことがわかる。

大津北郊は玄室長幅比が2.00以上の玄室形態の横穴式石室が少なく、わずかに確認できる程度である。ところがその周辺の志賀地域や瀬田川西岸周辺には多くみられる。しかし、玄室が縦長長方形のものでも多くは正方形に近いもので、その他は正方形や横長長方形を持つ傾向にある。横長長方形には、基本的に玄室の長さが幅よりも短いものだけでなく、T字形と呼ばれる極端に幅が長いものもみられるため⁽³¹⁾、横穴式石室は様々な形をしていたことがわかる。

縦長横穴式石室で畿内型のものが多い区域は、畿内の影響を受け、畿内型石室ではないドーム状天井構造の横穴式石室を築造していた大津北郊では、九州地方の肥後型石室の構造を真似ていたと考えられる。石室の玄室規模をみると、ほとんど同じような大きさであり、表1で

示している玄室の長さと幅の平均値と、それらを玄室長幅比で示したものから玄室長幅比が1.54（p.40図22右の表）であることがわかり、畿内型石室には及ばないことがわかる。

北部地域の方は広い平地があるためほとんど密集せずに、点々と古墳群が造られ、総数がそれぞれ100基に満たない。しかし、古墳の内部主体をみると、中期から後期にわたり、横穴式石室より木棺直葬が多く占め、横穴式石室はこの地域にあまり受け入れられなかった。この地域の横穴式石室については、「前・中期の事例とともに後期前葉ころの木棺直葬墓が含まれており、後期段階においても横穴式石室の導入に消極的な方示す」と評されている⁽³²⁾。ただし横穴式石室には特徴的なものが多く、この地域をみるに重要なものもある。例えば、これまで述べてきた田中36号墳や西牧野41号墳である。平地が廣々としているため、点々と横穴式石室を内部主体とする古墳が造られる。玄室長幅比はほとんどが2.00以上の石室であり、畿内型石室と呼べるものが多いため、畿内からの影響を受けていたと考えられる。2.00以下の玄室を持つ石室もあるが、畿内の形態を持つ石室の方が多く存在している⁽³³⁾。遺骸安置空間や石棚など特徴のある石室内部を持っている横穴式石室は、九州地方にある「石屋形」と呼ばれる施設と言われている⁽³⁴⁾。そのため、九州・畿内の両方の特徴を受け入れて横穴式石室を建築したと考えられる。南部地域と同様に石室の規模をみると、表1の方で示している玄室の長さと幅それぞれの平均値から玄室長幅比を示すと2.13であり、畿内型石室のものが多いことがわかる。横穴式石室が大型である鴨稻荷山古墳を除いても、玄室長幅比の平均値は2.01と畿内型石室のものが多いことがわかる（p.40図22右上の表）。

南北2つに分けた地域を別々にして違いを述べてきたが、同様な部分がみられるものもある。北部地域の石室に横長長方形は現在のところ確認されていないのと、正方形が少ない。総じて横穴式石室の玄室の形態は縦長長方形が多い。南部地域においては3つの玄室の平面形態すべてみられるが⁽³⁵⁾、やはり多いのは縦長長方形である。玄室長幅比が2.00以上のものだけでなく、それ以下のものも両方の地域でみられる。玄室の平面規模の分布も同じ位置に密集しているため、この小地域においても、基本的な石室の玄室の形は総じて縦長長方形となっている。この2つの地域において、横穴式石室の建築数の差は大きいが、様々な特徴のある石室を建築し、似た形の石室も造られていたことがわかる。

7. まとめ

上記の湖西地域の横穴式石室を以下にまとめて本稿の結びとしたい。

1) 湖西地域全体の傾向

まずは、地域の共通性である。

横穴式石室の導入は6世紀前後であり、前方後円墳ではなく円墳に建築されることが多い。

横穴式石室を内部主体とする古墳は、群集墳を成しているのがほとんどを占め、単独で古墳を築くものは少ない。

群集墳の内部主体は木棺直葬もなかにはみられ、横穴式石室だけが埋葬方法として古墳内に築かれているということではない。

今回取り上げている横穴式石室において、南部地域と北部地域のそれら数をみると、圧倒的に南部地域の方がが多い。反対に、北部地域では木棺直葬をしている古墳があり、これは横穴式石室の数よりも多い。

玄室の形態はほとんどが縦長長方形を呈する。

石室に利用されている石材は、主に花崗岩の大型石である。その石ほとんどが石室周辺に分布しているものを使い、石室を構築している。

大まかに石の積み方をみると、下段では縦向きに石材を置くことが多いが、上段にいくにつれて横向きに石材が置かれるようになる。そして、隙間なく組んでいる。

時期ごとに石積みをみると、整った石を使っていたのが、だんだんと不整形の自然石を使うようになる。時期によって下段の石材を縦向きや横向きにかえており、持ち送りが急かゆるやかの違いで、それにあった石材の置き方もする。

2) 南部地域の特徴

南北の地域的な違いについては南部地域が、群集墳の古墳の埋葬施設が木棺直葬よりも横穴式石室の方が多く、その石室も多くの形態を成す。

玄室の壁が四周とも垂直で持ち送りをしていない平天井構造や、玄室の側壁が天井部に近いところでゆるやかに持ち送る、カマボコ型構造などが多い。そのなかで、玄室の壁が四周とも急激に持ち送るドーム状天井構造である石室はほとんどが大津北郊である。それらはまた密集して築かれる。縦長長方形である石室はほとんどが正方形に近い形をしている。また、石室の規模の正方形が

多くみられるときは、ドーム状天井構造の石室が造られ、そうでないときはほぼ平面の石室も築造する。

3) 北部地域の特徴

北部地域は、横穴式石室よりも木棺直葬が多いため、石室の数が少ない。

石室は畿内型と呼ばれる石室が多くみられる。石室の数が少ないので、玄室の奥壁側に遺骸安置空間や石棚を造る特異性がある。

この地域は平地が多く存在している。そのため、花崗岩が分布する場所から少し離れた位置に横穴式石室を内部主体とする古墳がみられる。

玄室形態は、縦長長方形の石室がほとんど占め、南部地域にみられる横長長方形の石室はみられない。

4) 南部・北部地域の違い

南部地域と北部地域で、古墳の埋葬方法が異なり、横穴式石室においても築造数に格差がみられた。しかし、北部地域の横穴式石室は、少ないながらも特徴的な石室が多くみられ、この地域を考える上で重要な役割を担っている。南部地域では、横穴式石室を内部主体とする古墳の群集墳が多くみられることから、積極的に横穴式石室を採用していたことがわかる。それぞれの古墳の横穴式石室に特徴的なものはないが、全体からみるとほかの地域ではほとんどみられない石室の形態をとっている。

これまで述べてきたことから、湖西地域の横穴式石室は全体的に規模や玄室形態は似通っているものの、細部は造られている場所によって、異なった石室を造っていることが理解できよう。

注

- (1) 田中勝弘「近江における横穴式石室の受容と展開」『紀要』1 滋賀県立安土城考古博物館 1993年。
- (2) 細川修平「6世紀前半代の琵琶湖周辺地域」『考古学論究』小笠原好彦先生退任記念論集 真陽社 2007年を参照。
- (3) 石井智大「横穴式石室に関する用語—研究集会の開催にあたって、近畿地方を中心に—」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会事務局 2007年を参照。
- (4) 辻川哲朗他「近江の横穴式石室」「近畿の横穴式石室」横穴式石室研究会事務局2007年を参照。
- (5) 注1の文献を参照。
- (6) 熊本県を中心と分布している石障系横穴式石室。玄室

が正方形を基本とし、ドーム状天井構造であり、天井に使われた石は一石あるいは二石。

- (7) 前期古墳は高島市内において、今津町の妙見山古墳群・新旭町の熊野本古墳群の中から見つかっており、首長墓である。
- (8) 花田勝広「近江における最古の横穴式石室」『滋賀文化財だより』No.158 滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1991年を参照。
- (9) 石神3号墳、石神4号墳。
- (10) 北牧野古墳群と西牧野古墳群と一緒にしている場合もあるが、ここでは分けて考えている。
- (11) 林博通他『齊賀塚古墳』マキノ教育委員会・マキノ遺跡群調査団 1998年を参照。
- (12) 宮崎雅充他『田中36号墳発掘調査報告書』高島市文化財調査報告書第14集 高島市教育委員会 2010年でこの名称を使用して述べられるため、ここでもそれを使用する。
- (13) 注12の文献を参照。
- (14) 注12の文献を参照。
- (15) 注11の文献を参照。
- (16) 注11の文献を参照。
- (17) 袖部の左・右は奥壁を背にしての方向。
- (18) 京都教育大学考古学研究会「湖西南部の古墳時代後期について」『史想』第20号 近江特集号 1984年を参照。
- (19) 春日山D-4古墳。
- (20) 大崎哲人ほか『大通寺古墳群』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会 1995年を参照。
- (21) 注3の文献から抜粋。
- (22) 田辺昭三『須恵器大成』角川書店 1981年を参照。
- (23) 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課『滋賀県遺跡地図 平成22年度』2011年を参照。
- (24) 注11の文献を参照。
- (25) 第1章の第2節を参照。
- (26) 注13の文献から抜粋。
- (27) 同志社大学考古学実習室北小松古墳群研究会『北小松古墳群調査報告』1982年を参照。
- (28) 1、横田洋三『春日山古墳群』春日山公園整備関連遺跡発掘調査報告書 滋賀県教育委員会事務局文化財保護課・財団法人滋賀県文化財保護協会 2002年を参照。
2、用田正晴『琵琶湖をめぐる古墳と古墳群』サンライズ出版 2007年を参照。
- (29) 注28の2と同じ。
- (30) 第1章の第2節を参照。前方部と後円部に横穴式石室がみられる。
- (31) 玄室の長辺の中央に羨道が取りつけられている。
- (32) 注4の文献から抜粋。
- (33) 猥内型の横穴式石室は、縦長長方形であり、玄室の長さと幅がほぼ2対1の比率である。
- (34) 注12の文献を参照。
- (35) 3つの平面形態は、横長長方形、正方形、縦長長方形。

報告書抄録

ふりがな	きょうとたちばなだいがく ぶんかざいちょうさほうこく							
書名	京都橋大学 文化財調査報告2012							
副書名	醍醐寺清瀧宮拝殿、橿原丸山古墳、鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群							
卷次								
シリーズ名	京都橋大学 文化財調査報告							
シリーズ番号	6							
編著者名	一瀬和夫 登谷伸宏 荒木瀬奈 八軒かほり 村岡瑞穂							
編集機関	京都橋大学 文学部文化財学科							
所在地	〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL. 075-571-1111							
発行年月日	2013年3月31日							
所収遺跡名	所 在 地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
かしはらまるやまこみん 橿原丸山古墳	奈良県橿原市・五条野 町・大軽町・見瀬町	29205	622	34° 28' 40"	135° 47' 48"	2012年6月25日～ 10月31日	34,000,000m ²	学術調査
ろくやこふんぐん 鹿谷古墳群 おおいちしぐん 大市支群	京都府亀岡市稗田野 町鹿谷大市	26206	32	35° 01' 50"	135° 32' 06"	2012年8月7日～ 20日	2,902m ²	学術調査
ろくやこふんぐん 鹿谷古墳群 ちゃのきやましぐん 茶ノ木山支群	京都府亀岡市稗田野 町鹿谷丸ヶ条	26206	32	35° 01' 50"	135° 32' 06"	2012年11月23日、 12月29・30日、 2013年3月23日	1,400m ²	学術調査

京都橋大学 文化財調査報告 2012

醍醐寺清瀧宮拝殿、橿原丸山古墳、鹿谷古墳群大市・茶ノ木山支群

発行 京都橋大学 文学部

〒607-8175 京都市山科区大宅山田町34 TEL 075-571-1111

発行日 2013年3月31日

印 刷 (有)真陽社

〒600-8475 京都市下京区油小路仏光寺上ル TEL 075-351-6034



京都橘大学

KYOTO TACHIBANA UNIVERSITY